AMAN NEXUS × Psalms Of Planets Eureka seveN

70-90

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＮＥＸＵＳ　×　Ｐｓａｌｍｓ　Ｏｆ　Ｐｌａｎｅｔｓ　Ｅｕｒｅｋａ　ｓｅｖｅＮ

【Ｎコード】
Ｎ５４８７Ｓ

【作者名】
７０－９０

【あらすじ】
今の世の中に退屈さを感じていた少年は、ある日一人の少女と一機のＬＦＯに出会い、彼女らと共に旅立つ。もう一人の少年はある日、光と合体し、巨人となって戦う使命を背負わされる…。

最初に

一人の少年は、かつて未曾有の大災害から世界を救った英雄である父を持つ。しかし、今の世の中に退屈感を感じ、誰からも見放されていた。しかし、突如ある少女に出会って一目ぼれし、彼女が所属している組織に加わった。

一人の少年は唯一、そんな彼に明るく振る舞い、そして彼の親友として退屈な世の中を過ごしていた。しかしある日、謎の光が彼を包み、謎の怪物が登場したと同時に彼は巨人となった。

一人の少女は今まで他の人間と変わったところがあり、感情も一つも感じていなかった。しかし、ある少年に出会うことで、人間としての何かが変わっていく。

そんな3人が辿り着く、それぞれの答えとは…？

Prologue（前書き）

設定

・登場ウルトラマン　：　ウルトラマンネクサス：アンファンス
Or　ジュネッス

Prologue

ここは…、地球のように見えて、地球ではない。

地球は汚染が進み、住めない環境と化してしまった。そして人類は他の惑星へと移住し、住処としていた。

人々は、ここを”約束の地”と呼んでいる。地球との違いは人にはなかなか見えない未知の粒子”トラパー”が存在していることと、この惑星は”スカブ・コーラル”と呼ばれる珊瑚状のもので構成されているために地殻変動が起こりやすいことだけだ。ほとんど地球と同じ大気のため、地球にいた時とは他に変わりはなかった。また、それを利用した”リフティング”という新しいスポーツが生まれ、若者の間で人気となっている。

人々はもはや、ここに住み慣れ、何もなかったかのように、平和な生活を営んでいた。

しかし、一人、この世の中を退屈だと捉える少年がいた。

その名は、レントン・サーストン。彼は、以前トラパーの異常発生による大災害”サマー・オブ・ラブ”から命をかけて救ったといわれる英雄、アドロック・サーストンを父親に持っていた。しかし、彼はレントンがまだ幼いころに亡くなっており、レントンには彼のことをあまり知らなかった。また、父親と彼は所詮、血が繋がっても別物であり、必ず才能までも遺伝するわけではなかった。まず、成績が悪かった。

それに加え、彼の姉であるダイアン・サーストンも行方不明であり、そのことで彼はからかわれていた。駆け落ちだろうとか、父親と違ってまったく間抜けものだから彼を捨てたんだとか…。また、変な空想を思い浮かべ、『きもい』と吐き捨てられていた。

「アクセルさん…、この成績だとレントンは軍に入隊できませんよ…」

「入隊だと!?　こいつはわしの家業を継ぐ孫なんですぞ!!　軍に入らすなんぞ、そんなたわけなことするもんか!!」

あまりの成績の酷さに頭を悩まされた担任にレントンは呼び出しをくらわされ、さらには祖父であるアクセル・サーストンも呼ばれ、面談を受けていた。担任は彼にその報告をするものの、頑として家業の後継者にするつもりだと啖呵
たんか

を切るばかりだった。

レントンはもはや、この世の中にうんざりしていた。

しかし、唯一心の許せる人がいた。

「おーい、レントン！！」

「ああ、レンか…」

地獄のような面談を終え、ただぽつんと芝生に座っていたレントンは、ある少年の方に顔を向けた。

レン・センジュである。レントンの唯一の理解者、また親友に近い存在であった。彼は人懐っこい存在であり、誰にでも受け入れられやすい少年だった。

最初レントンは彼から拒絶していた。レンもまた、他の級友から止めるように忠告されていたが、まったく耳に入れずにレントンに近寄っていた。レントンはいつの間にか彼に惹きつけられるようになり、そして今に至っていた。リフなどの話をしていた。そんな2人を周りの人達は不思議に思っていた。しかし、彼らは全く気にしていなかった。

「どうしたんだよ、そんな暗い顔して？」

レンは彼の隣に座った。

「また呼び出しくらっちゃってさ…」
「ああ…。先生、怒ってたしな」

今までもレントンは学校から何度も何度も、呼び出しをくらっていたのだった。アドロックの子息だからもう少し努力しろとか、耳が腐る程注意されていた。

「世の中平和平和って何度も言われているけど、何が平和だよ…」
「えっ？」
「だってさ、俺のじっちゃんなんか無理やり家業を継がせようとするし、学校なんかもっと俺の父親に誇りを持てとかさ…。すっかり自由を奪われて…。この先どうなるか不安ばっかだよ…」

そしてレントンは芝生に寝転び、空を見上げた。

「唯一出来ることは、こうやってリフするだけだよな…。他のやつなんて暇すぎて…、もう息が詰まりそうだよ…」

レントンの脇には、リフボードが抱えられていた。彼の楽しみといえば、リフをする事のみであった。

理由は”ｒａｙ＝ｏｕｔ”と呼ばれる雑誌を見た時からであった。”ゲッコーステイト”と呼ばれる、元軍の人達が結成した組織が発行した雑誌である。その組織のリーダーである、ホランド・ノヴァクに彼は憧れをもっていたのだった。ホランドは天才リフボーダーとして有名であり、最難関の技といわれる”カットバックドロップターン”を唯一習得しているのであった。レントンは自分にも出来る筈だといつも練習をしていたのだった。

「そっか…。確かにそうだよな…」

レンは納得した。彼もまた、あまりにも平和過ぎて他に面白いものはないように感じられたのだった。

「まあ気にすんなって！！　ただレントンの父親同然になるように、無理やり頭に詰め込ませようとする学校もどうかしてると思うぜ！！」

「レン…」
「自分の人生って、元々自分で創り出すもんだからさ…、家業を継ぐか継がないかも自由だと思うな！」
「そうか…、そうだよな…」

そして風がさらに強くなっているように感じられた。風が芝生を靡かせている。

「そうだ！！　お前もリフしに来ないか！？　おススメのリフスポットがあるんだ！！」

レントンはすばやく身体を起こし、レンに提案した。

「いいのか？　俺、それ持ってないし、リフなんかやったことないけど」

レンはレントンの持つリフボードを指差して尋ねた。

「大丈夫！！　貸してやるし、やり方も教えてやるから！！」
「そっか！！　ようし行こう！！」

2人は勢いよく立ち上がり、そのリフスポットに走って向かっていった。

しかし、出発して5分後…。

レントンが急に立ち止り、凝視し始めた。

「どうしたんだレントン？　…あれ…？」

レンも彼が見ている方向を向いた。そこには、レントンがいつも訪れるというリフスポットには無数の柵が、そこを囲むように設置されていた。さらに『立ち入り禁止』という看板が掛けられていた。

彼は動揺し、思わず走りだした。

「お、おい待てよレントン！！」

レンも追いかけ、柵に向かった。

レントンが柵に指をかけると、足が自然に力が抜けていった。

—う…、嘘だああああぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！

レントンは絶望に満ちていた。内なる彼は頭を抱え、悶絶していた。

「おいこら、そこの小僧達！！　入ってくるんじゃない！！！！」

軍服らしき服を纏っている男性がレントンを注意した。

「あの…。ここ、リフスポットだと聞いたので…」

レンはそう言った。

「ああ…。まさか、以前に軍を抜け出して、我々に抵抗するあいつらに憧れを持ってるのか…」

「まあ…、そんな感じなんですけどね…」

「…ここに基地を建設することになった。誰も使われなくなって、折角の機会だしな…」

―使ってるっつうの…！！！！

レントンは心で軍人につっこんだ。

「まあ諦めろ。お前達の平和を守るためなんだからな」

そう言うと、敷地内にいる軍人達は去っていった。

レンは普通に歩いているものの、レントンはすっかり肩を落としていた。あまりにも彼から負のオーラが漏れ出しているように感じられ、レンは思わず冷や汗をかいた。

「そっ、そんなに落ち込むなよレントン…。他にもいいリフスポットがあるはずだろ？」
「ねぇぇよ！！！　俺が知ってるのはあそこだけなんだよ！！！」

レントンはもはや泣きたい気分であった。唯一の楽しみを奪われたからであった。

レントンはさらに平和が憎くなっていったのだった。

しかし、そんな平和な世の中に密かに魔の手が伸ばしていた。

ある夕方、森の中で必死に走っている男性がいた。

「ハァ…、ハァ…、ハァ…！！！！」

そして聞いたことのない鳴き声が響き渡った。

「助けて…、助けて…！！！　ううううあああああああああ！！！！

！！！」

「ひ、ひいいいいっ…！！！」

すぐ近くで断末魔の叫びが聞こえた。さらに後ろの様子を窺いながら、さらに速度を速めていった。

しかし、彼の目の前で鳴き声がした。すぐに振り向き、怯えた。

「うあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

森の中では断末魔の叫びと、気味悪い音が響き渡った。

Prologue（後書き）

ＯＰ　：　英雄　／　ｄｏａ

この曲は元々『ネクサス』のＯＰですが、英雄になろうと決意したレントンを応援するという事で選びました。

ＥＤ　：　惑星の森　／　鬼塚ちひろ

Take Me Higher（前書き）

Name from ”TAKE ME HIGHER” by V6

設定

・登場ウルトラマン：ウルトラマンネクサス：アンファンス or ジュネッス

Take Me Higher

ベルフォレストのある一軒、光が灯っていた。

ここは、レントンの祖父、アクセル・サーストンが経営しているジャンク屋、（有）サーストン工業　ガレヱジ・サーストンである。アクセルは、多くの技術者の間で有名であり、『サーストンと言えばアクセル』と言われるほどである。

しかし、一方は頑固爺でもあった。彼はいつもレントンに厳しく接し、何度もこの店を継げと何度も言っていた。たまにレンも遊びに来るが、たとえ他人だろうと容赦しなかった。

「おばんっす！」

「おお、発掘屋か」

アクセルは訪問してきた発掘屋のもとに駆け付けた。ＬＦＯに使えそうな部品が入荷したからだ。アクセルはそれを聞いて感心していた。

一方レントンはサーフボードのような板を点検していた。

「ふわぁぁぁぁっ…」

彼は欠伸を掻いた。すると頭にレンチがぶつかった。

「でっ…！！」

「こらレントン！！　テレンコテレンコすんな！！　アホ面下げてそんな板っきれに乗るようなくせしおって！！」

「いってぇ…」

レントンは頭を押さえながら彼の方に身体を向けた。

「板じゃねぇよ…、リフレクションボード！　トラパーの波をつかむんだ」

そしてレントンはリフボードを抱えて呟いた。

「でっけぇ”波”に乗りてぇなぁ…」

「なんじゃ？　ヒーロー気取りのホランドの真似っ子か？」

するとまたレントンは立ち上がり、反論した。

「バカにすんな！！　ホランドすごいんだよ！！　軍を裏切って抜け出して抵抗してさ、すんごい覚悟だよそれ！！！　平和ボケしてる連中と一緒にすんな！！」

するとアクセルは眼鏡を外した。拭きながらこう言った。

「じゃあお前はどうなんだ？　レントン、まさかお前もヒーローになれると思っとるのか？」

レントンは言い返せなかった。彼のこの一言は的を射ていたのだった。

それでも言い返すことが出来ないレントンは、ややいらつきを持つだけであった。

「ダイアンがあんなヒーロー気取りの野蛮な奴らに誑かして…、ここに残ったのはレントンとワシだけ…。軍とか空賊とかなんじゃ…。ただ平和にくらせりゃええだけのことじゃろうが…？」

それを聞くと、レントンの手の握り方が強くなっていった。

―なんじゃそりゃ…。”食うには困らない平和”…？　”ここで生まれて死ぬだけの人生”…？　そんなの…！！

彼は我慢できなかった。これ以上この静まった海に留まるのはもう懲り懲りだった。

レントンは踵を返し、部屋のドアノブに手をかけた。

「何やら言いたそうな顔だな…」
「…別に…」

そう言うとレントンは俯きながら、自分の部屋に戻っていった。

「ふん…」

アクセルはそんなレントンは呆れながらも見送った。そしてアクセルは手袋を外してテーブルに置き、自分の椅子に座った。

煙草に火をつけ、机の上に置いてある箪笥を開けて、ある部品を取り出し、机の上に置いた。三角形状の部品であった。

そして机に立てられているレントンの父親、アドロックの写真に目を向けた。

「アドロック…。お前がこんなもん見つけださなければ…。…もうダイアンはここには戻らん…。どうかレントンだけは連れて行かんといてくれ…」

アクセルは、答えるはずもないアドロックの写真に頼んだ。

「ダイアン姉ちゃん…」

一方レントンはベッドの上で寝転んでいた。

「今なら俺、この街を出ていったのわかるよ…。この街じゃあ、待ってても”波”は来ないもんな…」

レントンの部屋にはホランドのポスターなどが貼り巡らされていた。そして、”波”が来るのを待っていた。彼の人生に転機が訪れるのを今まで待っていたのだった。

しばらくすると、外から微かに轟音が鳴るのが聞こえた。レントンは、外がみえる天井の隙間から覗いてみると、何やら黒い物体が向かってきた。

そして、派手な音を立てて敷地内に着陸してきた。

「んなっ…！！！」

窓越しに見てみると、ＬＦＯであった。レントンはすぐに部屋を飛び出し、その元に向かった。

そしてアクセルも駆けつけてきた。

「どうしたんじゃ一体…！？」

「これＬＦＯだよな…？　見たことないタイプだなこりゃ…！！」

そのＬＦＯは赤いラインが各地に流れており、顔をよく見てみるとロボットにもかかわらず目には瞳孔のような黒い点が打たれてあった。

コクピットから人影が出てきた。レントンはそれを見て叱ろうとした。

「おい！！　あんたどういう操縦してる…」

しかし、そのＬＦＯのライダーを見たレントンは言葉が止まった。その人はＬＦＯに指差してこう言った。

「ほらね、”この子”寝ぼけてるんだ…。起こせるよね、キミなら？」

—か…、かわいい！！！！！

その人は、青竹色の短髪に金色の髪留め、首輪をつけた、無表情でもなおとても魅力的な少女だった。

すぐにレントンは一目ぼれした。

「は…、はい！！！」

注意するどころか、顔を紅潮しながら依頼を受けてしまったレントンであった。

一方、遠くからその様子を眺めていた男達がいた。その中にホランドも含まれていた。

「おいおい…。ひっでぇ着陸だなぁ…。敵に位置バレたなこりゃ…」
「なぁ、ホランド…、ホントにあの工場で直んのぉっ？　だとしたら、別にあんたが頼めばいいのによぉ…」

黄色いランニングシャツを着た男がホランドに提案した。

「俺はあそこに行けねぇのっ…！　だが…、彼女にはどうしても”アレ”を手に入れてもらわんとなぁ…」

双眼鏡を目から離し、ホランドは続けた。

「人型機動マシン”ＬＦＯ”…そのすべての原型（モデル）であり、世界で初めて発見された幻の機体、”ニルヴァーシュ”の最後のパーツを…！」

一方レントンはそのニルヴァーシュの修理を進めていた。彼はあることに気付いた。

「れ？　この機体”コンパク・ドライヴ”がついてないよ」

”コンパク・ドライヴ”とは、従来ＬＦＯに不可欠な部品であり、車の部品で言うエンジンキーみたいなものである。しか、このニルヴァーシュには搭載されていなかった。

「無いよ。ニルヴァーシュにそんなの必要ないもの」
「コンパク・ドライヴなしでＬＦＯを…？」
「うん。”心”を通じあわせればいいだけだもの」

少女は無表情で答えた。レントンは頬を緩ませた。

「へぇ…。きみ、変わってるね」

少女は機体から降り、こんなことを言った。

「ホランドが、この子はここに来たら直るって言ったんだけどなぁ…」

「ええっ…！？」

レントンは驚き、すぐにコクピットから出てきた。

「きみ、まさか…、ホランドの仲間なの！？」

「知ってるの？」

「知ってるの何も…、軍に反旗を翻してゲッコーステイトを率いる大ヒーロー！！　ゲリラ活動しながら世界中のリフスポットを回って波に乗る…、俺の憧れだよ！！」

彼はその事実を知ると急にやる気が湧いてきた。すぐにコクピットに戻り、道具を掴んで作業を再開した。

「こりゃ…、気合い入れて直さなきゃ！！」

そんな様子を外からアクセルが覗き込んでいた。

翌日、そのジャンク屋を複数のＫＬＦが飛行していた。

「こちら塔州連邦軍イズモ隊ＭＳ２０、目標を確認」
『よし、いぶりだせ』
「了解」

軍人達であった。彼らはニルヴァーシュを確保しようとしていたのだった。

レントンの作業はまだ難航していた。彼は手ぬぐいで顔を拭いた。

「はぁ…。やっぱコンパク・ドライヴ付けてもダメか…」

それでも作業を続けた。すると隣から声がした。

「ねぇ…」

すぐに首を動かすと少女の顔が目と鼻の先にあった。

「なっ…！！！」

レントンはついビビって後ずさりしてしまった。

「直った？」

「い…、いや別に…！！」

少女はコクピットに入り、修理の経過を確かめた。彼女の髪から何か懐かしいような匂いがした。レントンは未だに頬を赤くしながらゆっくりと彼女に目を向けた。

しかし、彼女の胸元が見えそうな角度になってたためすぐに目を逸らした。頭の中では妄想が繰り広げられていた。それで何とかしようと首を振り、気分転換した。

次の瞬間、上空からブザー音が鳴った。２人はすぐに上を向いた。

「なんだ、この音…？」

「来た…！！」

少女は警戒心を高めていた。上空では数機のＫＬＦが作戦を開始したのであった。

一機はミサイルを発射し、ジャンク屋にぶつけた。

「うわあああああっ！！！」

そして爆発した。レントンはゆっくりと空を見上げた。

「ったく…、今度は何だよ…。……！！！」

レントンは数機のＫＬＦを見て驚いた。おそらくこの少女を捕まえようとしているに違いないと確信した。

少女は臨機応変にニルヴァーシュに乗り込んだ。そして電源をオンにし、発進のスタンバイを確認した。それを見たレントンは動揺し、止めに入った。

「行っちゃダメだ！！　こいつはまだ直ってないんだぞ！！」
「でも…」
「死にたいのかよ！！　まだ完全にメンテナンスが終わったわけじゃねぇんだぞ！！」

レントンは注意する。しかし、彼女は顔一つ変えぬままであった。するとこんな解決方法を提案した。

「だったら…、キミも来てよ」

「えっ…？」
「メンテナンスが必要なんでしょ？　だったら乗って」

乗りたかった。しかし、彼には葛藤が生じていた。

「え…、あの……、出来れば俺も行きたいよ…、ＬＦＯに乗れるし…。でも……軍に対抗するなんて…そんなの無茶だし…」

レントンは動揺のためにうまく言葉にできなかった。少女はわからなかったがしばらくして彼を理解した。

「じゃあ行かないんだね」

そして少女はレバーをつかんだ。

「ま、待って…！！　行きたいよ…！　行きたいけどまだ俺にはレポートが残ってるし…」

「キミ…」
「？」

「やりたいのにやらないなんて…、変わってるねキミも…」

少女は無表情でまさにレントンに呆れていることを匂わせるようなことを言った。

今の一言で、レントンの葛藤がパッと消えた。

ニルヴァーシュは彼女を連れて空へと飛び立っていった。

「これでいい…、いいんだ……」

レントンは呟いた。

「ちっ…！！」

「…ってなわきゃねぇぇぇぇだろぉぉっ！！！！！」

しかし実際は後悔していた。レントンはすぐに家を飛び出し、バイクに跨った。するとアクセルに呼び止められた。

「レントン！！」
「じっちゃん…、今説教を聞いてる場合じゃあ…」
「餞別だ」
「えっ…？」

するとアクセルは、三角形のものを取り出し、レントンに投げ渡した。

「”それ”でニルヴァーシュを完成できる」

アクセルは割れたレンズをつついて取り出し、眼鏡をかけた。

「ヒーローやらなんやら、勝手になるがいい…」
「うん…！！」

アクセルは無愛想な態度だったが、それでもレントンは見送ってくれたことに感謝していた。

そして彼はバイクに跨り、発進した。

—俺は…、波が出て来ることを待ち望んでいた…。

「おい君、ここから先は立ち入り禁止だぞ！！！」

―でも、波が出てきても…。

軍人の注意を耳に入れずにそのままバイクごと柵につっこんだ。

―このままビビっていりゃノレるわけねぇだろっ！！！！

レントンはリフボードに跨って高く跳びあがり、ニルヴァーシュのもとへと接近した。

それにニルヴァーシュは気づいた。少女がすぐに目を向けるとレントンが高く飛び上がっていることに気付いた。

「うおおおおおおおっ！！！」

そして、ニルヴァーシュの肩に着地し、すぐにコクピットに駆け付けた。

「キミ…、どうして…」

「き…きっ、き…」

何も言えていなく、少女は理解できなかった。しかし、レントンはようやく落ちついて口にした。

「きみが好きだぁぁぁぁぁっ！！！！！」

しかし、少女はまったく意味分からなかったのか、無表情かつ無反応だった。レントンはコクピットに素早く入っていった。

「あれ…？」

彼は今の雰囲気になれずに疑問符を持ったものの、ゆっくりと考えるとやっと理解した。

「うああっ…！！　何言ってんだ俺…！！？　…ち、違うんだ君…、今のは…！！」

すぐに動揺し、慌ててふためいた。

「じゃなくて…、俺がここに来たのは、ニルヴァーシュを叩き起こしに来たんだよ！！」

レントンは三角形の部品と道具を取り出し、その部品をコンパク・ドライヴに差しこんだ。

「どうだ？」

しかし、大した変化は見られなかった。前を向くと一機のＫＬＦがミサイルを発射しようとしていた。

「いっ…！！」

ＫＬＦはミサイルを発射し、ほとんどがニルヴァーシュに当たった。

「うわあああああっ…！！！」

「うっ…！！」

その振動の拍子に少女は頭をぶつけ、気を失った。

「き…、きみ！！　しっかり！！？」

そのままニルヴァーシュは落ちていく。今の攻撃でニルヴァーシュはほとんど活動できなくなっていたのだった。このままだと数秒で地面に激突してしまうのであった。

「やばい、やばいよぉぉぉっ！！！！　地面が！！」

レントンは慌ててふためいていた。そして何とか止めようと彼女がつかむハンドルを重ねて掴んだ。

残りのミサイルがニルヴァーシュに近づいてくる。

「くっそぉぉっ…！！！　ここで死んでたまるか！！！」

彼は念願の”波”に乗ったばかりであった。早くもこのまま死んでしまうのはもってのほかだった。

「いい加減に…！！」

モニターに何かが映し出されていた。ローマ字が表示されていたのだった。

「起きろ、ニルヴァーシュ！！！！」

それに応じるかのようにモニターに”ＥＵＲＥＫＡ”という表示が現れた。

さらにニルヴァーシュの身体に変化が訪れた。光り始め、次々とＫＬＦを飲み込んでいった。

その様子をＬＦＯに乗っていたホランド達は驚いていた。

『何だこれは！！？』
『トラパーか！！？』
「いや、違う…！！　これはまさか…！！！」

そしてニルヴァーシュを中心として巨大な虹色の柱が出来あがった。次々とＫＬＦを包みこんでいった。

「戦闘隊０２、消滅しました！！」
「なんだあの兵器は！！？」

「すっげぇ…」

”Ｒ６０６”に搭乗しているランニングシャツを着ている男は驚いていた。後部席に乗っている男はカメラを取り出し、何枚か撮影していた。

「これが伝説の…、”セブン・スウェル”…！！　ついに目覚めたか…！！！」

ホランドは息をのんだ。

未だに虹色のドーム状の光が現れており、周囲を蔽いつくしていた。

しばらくすると光は消え、ニルヴァーシュが起こした”セブン・スウェル現象”の周囲は大量の塩となっていた。

「今の…、一体…？」

レントンは今起こった光景にもはや絶句していた。

しかし、ハンドルをつかんでいる彼の手を見ると彼女の手の上に重ねていたのだった。彼はすぐにパッと離した。

「ごごごごご…、ごめん…！！！　別に俺はそんなつもりじゃ…！！」

少女はレントンを見て考えていた。レントンが叫んだことによってニルヴァーシュは今の強大な力を発揮したのかと…。

「あっ、そうだ。…キミ、”好き”って何？」
「だぁぁぁっ…！！！！！」

レントンは驚いた拍子にコクピットのガラスに強く頭をぶつけた。

「イテテテテ…。はっ…！！　…それは勢いで…、いや…、好きって言うのは嫌いの逆の意味で…！！　なんつうか欲しいつうか…、必要つうか…！！　いやこれは恋愛だけに限るんじゃなくて…！！！」

レントンはうまく言葉にできなかった。

少女はコンパク・ドライヴを押して、中にしまった。

「どうやらこの子には、キミが必要みたい」

レントンは息をのんだ。少しずつ頬が赤くなっていった。

「ねぇ…、君の名前教えてくれないか…？」

「…”エウレカ”」

少女はその名を言った。

―エウレカ…。あの文字と同じ…！！

セブン・スウェル現象が起きる前にモニターに表示された文字を思い出した。

そんな時、通信が繋がった。

『こちら９０９、ホランドだ！！　サーストンとこのせがれはいるか？』

「ホ…、ホランド…！！　…は、はい！！　レントン・サーストン、ここにいます！！」

レントンはすぐに緊張して応じた。

『ニルヴァーシュを目覚めさせたのは君だな？　その行動と勇気に感謝と敬意を表す』

「あ…」

彼は褒められた。自分の憧れであるホランドに初対面ながらも褒められたのだった。すっかり動揺しすぎて息がつまりそうであった。

『それでどうする？　よければウチに来るか？』

「えっ…？」

しかし、答えは一つであった。

「はい！！！」

レントンは目を輝かせ、承諾した。

これからレントンの旅が始まるのであった。ゲッコーステイトの一員として。

彼は”波”に乗ることが出来たのだった。人生を変えるような瞬間に遭遇し、彼自身その道を選んだのであった。

―じっちゃん、行ってきます！！

レントンは窓から、離れていくベルフォレストを眺めた。

すると、ゲッコーステイトの所有する空船、”月光号”から通信が繋がった。子供であった。

『こちら月光号、ねぇ、すぐ帰ってくる？』
「うん、もうすぐ」
「エウレカって妹いるの？」

しかし、実際は妹ではなかった。

『それじゃあ待ってるからね、”ママ”！！』

―あれ…！？　マ…、”ママ”…！？

レントンは耳を疑った。”兄弟”ではなくて”子供”であるという事実をうまく受け入れられなかったのであった。

彼は余計な”波”にも乗ってしまったようだった。

「おお…っ…」

「何と…」

政府では、ある会議を行っていた。スクリーンには鮮明にセブン・スウェル現象の一部始終を映し出していたのだった。

「これが、先日起こった爆発の映像分析です」

軍人はその様子を見て驚いていた。

「一体どうやってこんな力を…、ドミニク少尉…？」

「その時中心にいたのは、伝説の機体”ニルヴァーシュ”、我々大塔軍から奪われたＬＦＯです。…つまりそのすべてを握っているのは…」

そしてその名を告げた。

「第１級指名手配反政府ゲリラ、”ゲッコーステイト”…！！」

さらに彼の報告が続けられ、終わるとゆっくりと席に戻っていった。

「次に、ユウ少尉より報告が」
「はっ」

ユウと名乗る軍人が立ちあがり、前に出た。

「3日前から、ベルフォレスト付近の森林にて謎の失踪を遂げている人達が次々と増加していましたが、その真相がこちらです」

スクリーンに一枚の写真が映し出された。何やら不気味な生き物が佇んでいるのであった。

それを見た軍人は動揺した。

「ユウ少尉…。これは一体…」
「仮にこの生物を”ペドレオン”と称しましょう。ペドレオンは森林にて、数匹に分離して身を潜め、人間を感知して捕食し、成長を遂げていました…ということです」
「捕食だと…！？」
「そうです。さらに、軍が所有する武器では通用せず、ＫＬＦを用

いても、身体から可燃性のガスを噴出するととによって軍の攻撃を妨害した…」

ややざわつくようになっていた。確かに、この惑星で人間がこの怪物と共存していると聞くとやけに不安になってくるのであった。

「しかし2日前以降、”第三者”の出現によって、ペドレオンの生息は確認されていません」

「…”第三者”とは…？」

するとスクリーンの写真が変わり、一気に驚かせた。

そこには、銀色の巨人が映っていたのだった。

そしてユウは冷静にその名を告げた。

「コードネーム、”ウルトラマン”」

「”ウルトラマン”…？」

さらに何変わらぬ口調で続けた。

「ペドレオンとウルトラマン、この2体の出現は、先ほどドミニク少尉が報告したニルヴァーシュのセブン・スウェル現象に関連している可能性があります」

「な…、何だと…！！？」

軍人達は動揺した。まるで宣告されたみたいにだ。

「まさか……、”奴ら”が復活するとでもいうのか！！？」

「恐らく…」

レントンの旅立ちと同時刻に、”光”に選ばれたもう一人も旅立とうとしているのであった。

Take Me Higher（後書き）

OP：The Distance ／ Bon Jovi
ED：流星群 ／ 鬼束ちひろ

「ドミニクさ、この世の中に満足してる？」

「そんな子供染みた言動にみっともないことだと考えている事に変わりはない」

レンもまた、今の世の中に疑問を持つようになっていた。

森の中では謎の生物が蠢いていた…。

「うあああああっ…！！！！」

『直ちに未確認生物を掃討せよ！！』

そんな中一つの赤い光が地上に立つ…。

「何なんだ、あの巨人は…！？」

――Next Phase：”Rock Into The Night”

「シェアッ！！！」

謎の巨人、その名は”ネクサス”…。

Rock Into The Night（前書き）

Name from "ROCK INTO THE NIGHT" by LOUDNESS

Rock Into The Night

レントンが、初めてエウレカに出会う12時間前のことである。

ここは塔州連邦軍である。約束の地を統括する塔州連邦政府に所属している軍である。ここでは、この組織から見てはゲリラ組織であるゲッコーステイトを追っていた。

廊下では、ある青年が歩いていた。すると、後ろから肩を叩かれ

た。レンである。

「よっ、ドミニクじゃん！！」
「うわっ…！！」

レンの突発な行動に驚いてしまい、持っていた資料を落としてしまった。無数の紙が広く散らばった。

「あああああああっ…！！！！！」
「あっ、ごめん！！」

ドミニクとレンは慌てて紙を拾い始めた。どうやら重要な資料だそうだ。周りからクスクスと笑い声がした。

枚数を確認した後、壱枚も失くしてなかったからか、ドミニクは安堵して溜息をついた。

「はぁぁっ、よかったぁ…。…ってレン！！！　いつもそうだが、突発的に話しかけるのはやめてくれないか！？」
「ただ肩を叩いただけじゃないか！　まったく…、やっぱりドミニクみたいに頭が固い人はビビりやすいんだなぁ…」
「何だと！！？」
「冗談だよ冗談！！」

ドミニクはレンにつっこみながら早歩きしていた。

「てかさそれだから、またあの子に踏んだり蹴ったりなんだろ、どうせ！！」

「話をすり替えるんじゃない！！　それに、ここでそんな恥ずかしい話をするな！！」

ドミニクは顔を紅潮してレンを注意した。

ドミニク・ソレル。彼は軍の統幕本部情報7課に所属している。頭脳明晰なのは確かだが、このように極度のビビり屋で、方向音痴など、本当に軍人なのかと疑われるほど幾つもの欠点があった。

さらに実は、レンは軍が所有する孤児の保護施設に暮らしている。レンの両親は、彼が幼いころに『サマー・オブ・ラブ』の被害に逢って亡くしている。そして彼は戦災孤児としてこの施設に引き取られ、暮らしていた。

ドミニクとは幼馴染みたいなもので、レンは彼より下にもかかわらず、呼び捨てで彼の名前を呼んだり、仕事での失敗についていつもコケにしている。

「まあまあ…」

「はぁ…。いつも君は困るやつだ…」

ドミニクは不満を漏らすものの、揉め事が止んだ。そして2人は

歩き出した。

しばらくして、レンが口を開いた。

「なあドミニク」
「ん…？」
「俺さ、訊きたいことがあるんだけど」
「なんだ？」
「ドミニクさ、今の世の中に満足してる？」

間を置いた後、彼は答えた。

「どうして急にそんなことを訊くんだ？」
「俺の友達にさ、満足してない人がいるんだよ。リフスポットを勝手に軍の敷地にされたとか、あいつのおじいちゃんに跡取りしろと言われたとか、愚痴を言って来たんだ」

するとドミニクは立ち止った。

「ふん…、甘えん坊だなそいつは…。何もやりたいことが出来ないからという理由で、この平和な世界の環境にありがたく思うどころか不満を抱くとは、愚かなやつだ…」
「や…、やめろよドミニク、そんな酷いこと言うの！！　俺の友達なんだよ！？」
「そうか、すまない。だが、そんな子供染みた言動を言う奴は捻く

れ者だということに変わりはない」

そう言うとドミニクは去っていった。レンはただ立ち止って、彼の背中を見るだけしかできなかった。

「あんたがよっぽど捻くれてるっつうのーっ…」

小声で愚痴を零(こぼ)した。そして振り向き、自分の部屋に戻っていった。

レンはベッドの上で横になり、後頭部に手を乗せた。そして、さっきドミニクが言っていたことを思い出していた。

―『子供染みた言動』…か…。

確かに、昼ごろにレントンが言った我儘(わがまま)は少し変わっているし、子供っぽいかもしれない。平和な日和に不満を持つなんて誰も思っていないだろう。ほとんどが平和であることに感謝している。

ただ、平和のために、レントンのリフスポットが勝手に軍の敷地にされるなど、それぞれの楽しみが犠牲になっているのも事実だろう。レンもまた、レントンの考えに同感しようとしていたのだった。

「明日も学校だし、寝るか…」

そして掛け布団の中に入り、眠りに着いた。

「う…、うう…」

レンは、触感が異なることに気付いた。さっきまでふんわりとしていたものの、今ではちくちくとするような感じがしたのだった。

掌には数枚の葉が貼りついていた。

「何処だ…、ここ…？」

レンが目を覚ますと、見知らぬ森の中にいることに気付いた。

見上げると、不気味にも真っ赤な空、真っ暗な森の中が彼を囲んでいた。

彼はゆっくりと起き上がって立ち上がり、周りを見渡した。

そして何か見えた。建物らしきものが数本の木々を透かして見え

ていた。彼はすぐに森を抜けた。

「うぉぉっ…と…！！！」

危うく崖から落ちそうになった。僅かな量の石ころが落ちていった。

レンは動揺した。そしてゆっくりと前に目を向けると、凝視していった。

そこには、雲から覗き込んでいる太陽を背後にして、謎の遺跡が聳(そび)え立っていた。

レンは何か興味を持つようになっていた。今でもじっと遺跡を見ている。

「っしゃぁっ！！！」

そしてレンは意を決したように掛け声を上げ、遺跡へと走っていった。

一方森では、少人数の兵隊が森の中に入っていった。森の中に潜み、行方不明者を次々と増やした存在の正体を調べるためだった。

銃を構え、息を殺しながらゆっくりと前へ進んでいった。何度も何度も周りを見回し、警戒心を高まらせていく。しかし、今聞こえるのは森の葉などがお互いに擦りあう音、兵隊が草木を踏み折って鳴らしている足音のみである。

一人逸(はぐ)れてしまった兵士がいた。警戒心を未だに維持しながら見

回す。

一瞬枝が折れる音がした。すぐに兵士は振り向き、銃を向けた。しかし、誰もいなかった。そのことを確認すると踵を返し、前進していった。

しかし、彼には危険が迫っていた。一本の触手が、あまり音を鳴らさず、草木をかき分けながらすばやく彼の足元に伸びて来た。

「うあああああああああっ……！！！！！」

「はっ…！！！」

他の兵士達が悲鳴に気付き、動揺した。

「助けて…、助けてくれぇぇぇ…！！！！　あっ、あああああぁぁぁぁぁーーーーーーっ！！！！！！！」

さらに兵士達は動揺し、立ち往生してしまった。次々と銃をあちこちに向けている人が増えていった。

「慌てるな！！！　今は前を進むことだけに警戒しろ！！」

しかし、リーダーは動揺を隠しながら、兵士達に注意した。

しばらく歩いた時のことである。

「キィィィィーーーーーッ！！！！！」

猿の声ではない、誰も聞いたことのない不気味な鳴き声が森の中で響き渡った。

「なんだ、今の…？」
「もしかして…、怪獣か何か…」
「そんな筈はないだろ…」

しかし、さらに鳴き声が響き渡った。

「う…、うあああああっ！！！！！」

兵士の一人は、その鳴き声に圧迫され逃げ出してしまった。

「お、おい！！　どうしたんだ急に！！」

しかし、そのまま森の中へと消えていった。

「じょ…、冗談じゃねぇ…！！！　俺は怪物に殺されるなんて、ごっ、ごめんだ！！！」

兵士は必死に走っていた。銃のベルトを強く握りしめながら、死への恐怖から逃げ出そうとしていた。

しかし、さっきより大きな鳴き声がした。

「はっ…！！！」

兵士は立ち止り、銃を構えた。周囲を見回し、震えた手で銃を持ってあちこちに向けていた。

「で…、出てこい…！！！　俺がぶっ殺してやる…！！！」

市への恐怖があるにもかかわらず、動揺のために冷静な判断が出

来なかったのだった。そのために彼はそう言ってしまったのであった。

「ギァァァアーーーーーーッ！！！！！」

すぐ近くに鳴き声がした。

「はっ！！！　う…、うあぁあぁあぁぁぁ！！！！」

兵士が振り向くと、驚く光景を目にしたのだった。

そこには、見たこともない、不気味な生き物が彼の目の前に現れていたのだった。

”ビースト”と呼ばれるものであった。ちなみに”ペドレオン”と呼ばれる種類であった。

ナメクジなど不定型動物を合成したような形であり、さらに両腕に触手、全身に風船のような膨らみがあちこちにあった。

これが、次々と行方不明者を増やしていった要因であった。ちなみに、行方不明者はこの生き物の”餌”となっていたのだった。

「し、死ねぇぇぇぇっ！！！！！」

すぐにトリガーを引き、幾つものの銃弾を発砲した。しかし、何発も当たったはずなのに全くダメージを受けた様子はなかった。

「そ…、そんな…」

その隙を突き、ペドレオンは触手を伸ばし、兵士の身体に巻き付いた。

「う、うあああああっ！！！」

すぐに引っ張られ、その拍子に銃を落としてしまった。素早い速さで引き摺られ、引っぱられていく。そして浮かされた状態になった。

止まると、兵士はさらに身の毛のよだつ光景を目にした。

そこには、さらに無数の触手を伸ばして大きく広げ、まさに食べようとしている状態だった。

「う…、うあああああああ！！！！！」

ペドレオンの無数の触手は容赦なく、その兵士を包みこんだ。

その悲鳴を聞いた兵士たちはさらに恐怖感を募らせていった。

すると無数のペドレオンが一点に集中してきた。そして、まるでスライムのように混ざりあって合体し、漸次に巨大化していった。

”クライン”から”グロース”へと変化したのだった。

「キィィィィィィィイィィィィイイィィ!!!!!!!」

すぐに兵士達は見上げ、その不気味な生き物に動揺を隠せなかった。

「な…、なんだあの怪物は！！！？　まさか…、あれが今までの事件の要因だというのか…！！？」

すぐに兵士達が銃を向けてきた。しかし、明らかに震えているのは確かだった。

そして、銃を発砲したが、まったく効き目がなかった。ビーストからしては痛みすら感じない程度だった。

ペドレオンは、兵士がいることに気付くと触手を伸ばし、一人に巻き付いた。

「う、…うあああああああっ！！！！！」

兵士は引っぱられ、捕食された。

兵士達はただ身動きが取れないままであった。

しかし、上空から銃弾が放たれ、火花が散った。

「キィィィィィィィィィィィィ…！！！」

ペドレオンはのけ反った。

上空には数機のＫＬＦが駆け付けていた。

『こちらδ１より各機へ、直ちに未確認生物を掃討せよ！！』

『『了解！！』』

一機はミサイルを放った。無数のミサイルがペドレオンの位置を捉え、次々と命中した。

「キィィィィィィィィィィィィァァァァァァァ……！！！！」

さらにビーストはのけ反った。すると頭の触角から火球を放ってきた。ＫＬＦはすぐに回避したが、さらにもう一発火球を放った。それもまた避けられた。

すると、ペドレオンの背中からガスを噴射した。

『ミサイル…』

『撃つな！！　可燃性ガスだ！！！　もし銃火器を使用したら、各地に被害が及んでしまう！！！』

一機のＫＬＦのパイロットが喚起した。

もし、ミサイルやマシンガンを放てば大爆発を起こし、さらに大火災が発生する恐れがあった。

「キィィィィィィイイイイィ！！！」

しかし、ペドレオンが火球を放っても、何故か爆発しなかった。火球は一機のＫＬＦを捉え、命中した。

『うあああああっ…！！！』

そして爆発した。それでもなお、ビーストは火球を放ってくる。ＫＬＦは、必死で避けるだけで精一杯であった。

一方、レンは遺跡の中に入り、見回していた。そこには謎の彫刻が施されていた。何やら戦っているようであった。

それを眺めながら歩いて行くと、光輝いている謎の祠(ほこら)に辿り着いた。レンはゆっくりと手を伸ばして触れてみた。するとレンも光輝き、その祠の中に入っていった。

レンが入った祠の中は異空間であった。レンは見まわしていると、赤いY字型の紋章が現れ、そして姿を現した。

彼はそれを見上げた。

「あんたか？　俺を呼んだの？」

巨人は答えなかった。ただレンを見つめるだけであった。

「俺のこと全部わかってて、ここに呼んだわけね？」

巨人はまだ答えなかった。それでも、レンは分かり切っていたのだった。

「上等じゃん…」

そう呟くと、ビーストの鳴き声がした。すぐに顔を動かすと、モニターみたいなものが映し出され、ペドレオンが暴れているのを目にした。レンはそれを凝視していた。

「よし…、それじゃあ行きましょうか！！」

そう言うとレンの身体がさらに光輝いていった。

そんな時だ。ＫＬＦのモニターに謎の表示が出た。

『ん…！！？　なんだ！！？　上空２０００メートルより、謎の有機反応が…！！』

上空から赤い光が落ちてきた。そして、ビーストの前にドスンと地響きを鳴らして降り立った。ビーストは驚き、それによって後ずさりした。地上にいた軍人も砂埃が目に入らないように片手で隠した。

砂埃が立っていた。それでも軍人はその正体を探ろうと凝視している。

その中で、何者かがゆっくりと立ちあがった。しばらくして砂埃が消えさり、姿を現した。

軍人はある光景を目にして動揺した。

「きょ…、巨人だと…！？」

銀色の巨人が立っていた。胸に赤いＹ字型の紋章”エナジーコア”、両手にオレンジ色の刃”アームドネクサス”を備えていた。

この巨人こそが、”ウルトラマンネクサス”であった。

1人がネクサスに銃を向けた。

「待て！！　早まるんじゃない！！」

しかし、リーダーが手を上げて、止めるように言った。

「キ～～～～～～ッ！！！！！！」

ペドレオンはネクサスの姿を見つけると、鳴き声を上げ、体制を整えた。

「フンッ！！！」

ネクサスは構えて牽制し始めた。

両者とも、どちらかが攻撃してくるかを待機していた。

「シェェッ！！！」

ネクサスは掛け声をあげて走りだし、ジャンプして怪獣の頭に強烈なチョップを決めた。『ペドレオン』は鳴き声を上げてのけ反った。

そして巨人は怪獣を上から抑え、動きを封じた。しかし、怪獣は首を振り回して巨人を振り落とそうとし始め、巨人は持ちこたえようとするものの、投げ出された。

「ウアアアッ…！！」

ネクサスはその勢いで前転し、振り向いた。それと同時にペドレオンも振り向いた。

巨人は立ち上がって走り出し、ジャンプした。

「ハァッ！！！」

擦れ違い様にビーストの後頭部に強力な後ろ蹴りを決めた。

「キィィィァアアィァァアイイアイァイイ…！！！」

その勢いでビーストは倒れた。

「フンッ…！！」

ネクサスは着地し、ゆっくりと立ち上がって怪獣の方に身体を向けた。

『どうします？　あの巨人も攻撃を！？』

『いや、このまま待機しろ！！』

ＫＬＦは空から２体の戦いの様子を見降ろしていた。

「シェッ…、…フンッ！！！」

左手の”アームドネクサス”を”エナジーコア”に翳し、元の位置に戻した。すると赤く光り始めた。

消えると、ネクサスの身体は銀色から赤色に変わっていた。上級武士の着る裃袴（かみしもはかま）を彷彿とさせる姿であった。

”アンファンス”から”ジュネッス”に変化したのだ。

「シェッ！！　…ハァァァァッ…！！！」

ネクサスは両手の”アームドネクサス”を左側で交差し、ゆっくりと降り撒くように右手を左から右へと振った。

「シェアッ！！！」

そして右腕を上へと真っすぐに突き上げ、”フェーズシフトウェーブ”を発射した。

ある地点で光線が止まり、ゆっくりとオレンジ色の光が2体とその周辺を包んでいった。

「キ～～～～～～～ッ！！！」

場所の変化に、怪獣は気が動転していた。

そしてネクサスとペドレオンを包んだ光は上から下へと下ろすように消えていった。そこには2体の姿が消えていた。

『未確認生命体のトラパー濃度が低下！！　ついに０％！！』
『何だと！！？』

ＫＬＦのコクピット達は驚いた。

「き…、消えた…！！？」

軍人は驚いた。そして今の様子を確認し、本部に提出することを決意した。

一方、両者は牽制し合っていた。

ネクサスが怪獣を連れてきたこの空間は、”メタフィールド”と呼ばれる。人々には見えない空間である。この空間を発動してから3分間の間、ネクサスの本来の能力をさらに発揮し、必殺技を強化することが出来るのであった。

ペドレオンが走って来た。ネクサスも走りだし、突進を決めた。

「フンッ！！」

そしてパンチし、キックを決め、一歩後退して構えた。そして接近した。それに対し、ペドレオンは腕を振り回し、触手を腹に当てた。

「グオッ…！！！」

ネクサスはのけ反るものの踏ん張り、接近して前蹴りを決めた。さらに近付くと触手を振り回してきたので、両手で防ぎ、顔面にパンチした。

「キィィィイイィイイアアアアッ…！！！！」

ネクサスが接近しようとしたものの、ペドレオンの胴体の窪みが赤く光りだした。するとネクサスは後ろに大きく吹き飛ばされた。

「ウァアアアアッ…！！！！」

地面に叩きつけられ、その時の痛みに苦しんでいた。それに構わず、怪獣は近づいてくる。

巨人が膝をつくと同時に怪獣は片手で触手を振り回してきた。両手で防ぐものの、もう片手で背中を叩かれ、同時に投げられた。

「グアアッ…！！」
「キ～～～～～ッ！！！」

怪獣は立ち上がろうとする巨人の背中に触手を当て続けた。立ち上がれなかったものの、次の一発でネクサスは回避し、後ろ蹴りを決めた。

ネクサスは立ち上がり、怪獣を抑えた。怪獣は触手を振り下ろそうとするものの、巨人に掴まれ、両脇腹に一発ずつキックを受けた。

さらにネクサスは攻撃しようとするものの、片手を巻きつかれた。

そして触手から電流が流れ始めた。

「ウアアアアアアッ…！！！　グッ……、ウオォッ…！！！」

巨人は腕から来る激痛に苦しんでいた。さらにペドレオンは強くしようとする。

「ウァァァアアアッ……！！！！」

ネクサスは身を捩じらせ、悲鳴を上げた。

「ハッ…！！」

しかし、”アームドネクサス”の刃もとが光り始めた。

「シェアァッ！！！」

そして強く引き抜き、それと同時に触手を切断した。

「キィィィィイイイィィッ…！！！」

怪獣はその激痛に苦しんだ。ネクサスは一歩下がり、ゆっくりと構えた。

「ヘアァッ！！！」

力強い掛け声とともに、ネクサスの反撃が始まった。ネクサスは走りだした。

ペドレオンは左手の触手を振り回したが防がれ、腹にパンチを決めた。

ネクサスは一歩後ろに下がった。

「ハァッ！！」

ペドレオンの腹に強力なキックを決め、怪獣を大きく吹き飛ばした。

「キ～～～～～ッ…！！！！！」

そして崖に強く叩きつけられ、砂埃が飛び散った。その反動のためか動きがとれなかった。

ネクサスは真っすぐに立ちなおした。

「フンッ！！！」

両腕を下に強く突いて、左手右手の順に”アームドネクサス”を交差した。

「オオオオオオオッ…！！」

ゆっくりと両方の下腕を上げていき、エネルギーを溜めていく。間に無数の電流のようなもの流れていた。

「フンッ…、デァアアッ！！！！！」

両腕を大きく広げ、L字に組んで、”オーバーレイ・シュトローム”を決めた。水縹色（みずはなだ）の光線がペドレオンに直撃した。

「キ～～～～～～ッ…！！！！！」

光線が流れ込み、怪獣の身体は光線と同じ色に変色していった。光線が切れると爆発し、粒子化した。

ネクサスは腕を解いて下ろし、しばらく佇んでいた。

そして『メタフィールド』が解除され、オレンジ色に染まっていった。それと同時にネクサスは光と化して姿を消した。

オレンジ色の光が消えた時には、山地には何も戦闘の跡一つもなかった。

「はっ…！！」

レンは大きく目を開けて上半身を起こした。まだ深夜2時であった。そして頭を強く掻いた。

額から冷や汗が滴り落ちていた。

レンは、何か重みを感じた。ポケットから取り出すと、そこには、蛹（さなぎ）のような、ネクサスに変身するための道具、”エボルトラスター”があった。これによって、今まで見た夢が夢ではない事を悟った。

「それにしても…、なんで俺なんだろ？」

最初に思った疑問がそれだった。

「でも…、こういう非日常なことも悪くないんじゃないか？　ドミニク…」

しかし、非日常なことに興奮していたレンであった。

朝になった。いつものように朝日が顔を出していた。

すぐにリュックサックに必要なものを詰め込み、背負うと部屋を後にした。

敷地を出ると、そのまま何処かへと旅立っていった。軍人に呼び止められないようにうまくごまかしていった結果であった。

ここからレンもまた、山あり谷ありの旅が始まったのであった。

Rock Into The Night（後書き）

「ってこのタオル湿ってるじゃない！！」

「おーい、この資料頼むぞ！！」

「おい購買部頼むぞ」

―どうせ俺はただのパシリなんだ…。

ゲッコーステイトの意外な一面に落胆するレントン…。

しかし、その裏では新たなる”ビースト”が目覚め、暴走していたのだった…。

「ギィシャアアアアアアアアッァァァアアッ…！！！！！！」

||Next Phase：”Ray Of Light”

―今度こそ、あんたを逃がしはしないよ！！！

（姫矢の時の）ネクサスの掛け声がかっこいいです！！

Ray Of Light（前書き）

Name from "Ray Of Light" by Madonna

Ray Of Light

レントンとレン、それぞれ別の道ではあるが、旅を始めて2日後のことである。

レンはさまざまな街を訪れて、人に触れ合ったり、色々なところに訪れたりなどしていた。

彼は施設で幼い頃から暮らしていたため、親とはどういうものなのかわからなかった。しかし、触れ合う中で親子が楽しく遊んでいる様子を見れば、なかなか趣を感じられ、温かさも感じられたのであった。

それに加え、さまざまな人々に触れ合うこともできるのであった。金銭など関係ない。それを超えた繋がりがあるように感じられた。

彼の旅はそういう閉所の中では知られざるものを知ることができるのであった。

―はぁ…、なんか最高だわ…！！　いつも俺、あんな息が詰まるよ

うなところに住んでたしな！！

レンはすっかり満足していたのだった。

しかし、一方でその幸せを蝕んでくる者達と戦っているのであった。

あるリフスポット、数人の若者達が音楽を大音量で鳴らしながらリフを楽しんでいた。３６０などトリックを華麗に決めていた。なかなかの経験者だということが窺える。

「ようし、それじゃあ次は私の番ね」

「イエーーーーイ！！」

「頑張ってねぇ！！」

一人の若者がリフボードを抱え、リフをしようとした時のことである。

「おい、なんか音がしねぇか？」
「はぁ！？　何言ってんだよ？」
「ホントだって！！」

しかし、空から翅の音がした。しかも彼らに近づいて来る。すぐにその方を向いた。

「な…、なんだあれは…！！？」

そこにゴキブリのようなビーストが、鋭い爪を立てながら接近してきた。

「キァアアアアアォォォッ！！！！」

彼らはビビり、動けなかった。容赦せずに接近してきた。

「う、うわぁぁぁぁぁぁーーーーーっ！！！！」
「きゃあああああああっ…！！！！」

―ハッ…！！！

レンはその気を感じ取り、すぐに森の中に入って駆け付けた。数百本の木々を潜り抜け、そのもとに駆け付けた。

その先には、身体には骨のような骨格が目立ち、大きな口を持つビースト、”バグバズン”が口からリフボードなどを吐き出していた。そして、爪で歯の詰まりを取り除いていた。

「こいつ…！！」

レンは”エボルトラスター”を鞘から抜き出し、ネクサスに変身した。

「シェッ！！」

ネクサスは出現したと同時に、バグバズンの胴体に飛び蹴りを決めた。

「キィィアァアアアアッ！！！」

バグバズンは倒れ、身を捩って苦しんでいた。ネクサスはゆっくりと立ち上がり、構えた。

そしてビーストも立ち上がり、巨人に向かって走り出した。

「シェッ！！！」

ネクサスも走りだし、両者とも抑え込んだ。相撲取りをするかのようにお互いに押しまくっていた。

しかし、怪獣が押されていたのだった。踏ん張るものの、ゆっくりとビーストの足が後ろに擦れていく。

ネクサスはゆっくりとバグバズンの頭部を持ち上げていく。

「ハァァァッ……、テアアッ！！！」
「キァァァァァッ…！！！」

ネクサスは一旦離し、バグバズンの腹に蹴りを決めた。

「シェッ！！！」

さらに頭にチョップを決めた。ビーストは大きくのけ反った。
ネクサスは再び接近し、首をつかんだ。バグバズンは抜け出そうと身を震わすものの巨人は耐え、脇腹に蹴りを決めた。さらに頭部をつかんでアッパーを決めた。

「キァァァアアアァァッ……！！！」

バグバズンはのけ反った。ネクサスは構え、走りよった。
しかし、このままではいけないと思ったのか、ビーストは頭部を振り、ネクサスの胴体にぶつけた。

「ウオッ…！！」

ネクサスはのけ反った。バグバズンは腕を振り回すものの、ネク

サスはバク転して回避した。

そして接近し、頭部に回し蹴りを決めた。再び接近した。

「キァァアアッ！！！」

「シェッ！！！　…ハァァァァッ…、デアアアッ！！！！」

バグバズンが振る腕を受け止め、ネクサスは持ち上げて背負い投げを決めた。ビーストは弧を描きながら宙を舞い、地面に叩きつけられた。

バグバズンは倒れ、未だに立てない様子だった。

—なんか…、こいつは意外にちょろいもんだな…。

レンは呆れていた。彼からしては前回戦ったペドレオンと比べて、隙がありすぎて攻撃しやすいように感じられたのであった。

ネクサスはゆっくりと歩みよる。

「グワァァッ…！！！」

突如、ネクサスの右足に激しい痛みが走った。

バグバズンの尻尾に付いているもう一つの頭の鋭い牙が巨人の足を強く噛みついているのであった。ネクサスは油断の余りにも、ビーストの罠にはまってしまったのであった。

そこから、バグバズンのお返しが始まったのだった。

「ウァッ…！！！」

バグバズンの尻尾に足を掬われ、ネクサスは倒れた。噛まれた右足を押さえていた。

バグバズンは立ち上がり、体制を整えた後、尻尾を振って来た。

丁度立ち上がったネクサスの身体に派手に命中した。

「ヌァァァァアアアアッ……！！！！」

ネクサスは吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。身を捩り、痛みに苦しんだ。

―こいつ…！！　こけにしやがって…！！

バグバズンは油断させるためにわざと攻撃を受けていたのであった。レンは油断していたことを後悔した。

それに構わず、バグバズンが走って来た。そして飛び上がり、ボディープレスを仕掛けてきた。

「ハッ…、シェッ…！！！！」

すぐにネクサスは転がり、バグバズンの攻撃を回避した。

ネクサスは立ち上がり、ジャンプした。バグバズンは立ち上がり、ネクサスの位置を探った。しかし、どこにも見当たらなかった。そして上を見上げた。

「デアアアッ！！！」

するとネクサスが現れ、一回転してビーストの頭に踵落としを決めた。火花が散り、ビーストはのけ反った。さらにネクサスは腹に回し蹴りを決めた。バグバズンは横に倒れた。

「シェッ！！！」

ネクサスは”アームドネクサス”を交差して高速移動し、ビーストの背後に回り込んだ。そして不意打ちを決めようとした。

しかし、足元に硬いものがかちかちと鳴らしていた。すぐに見下ろすとさっきの牙が開閉を繰り返していたのだった。

―同じ手に乗るかっつうの！！！

「フンッ！！！　ハアアアッ……！」

ネクサスは尻尾をつかみ、ゆっくりと持ち上げていった。

「デアアアッ！！！」

掛け声とともに、ビーストを遠くへと投げだした。

「キァアアアァァァアアッ…！！！」

地面に叩きつけられ、身を捩って痛みに苦しんでいた。ネクサスはゆっくりと歩み寄った。

バグバズンは立ち上がった。

「ハッ！！」

ネクサスはパンチをしようとしたものの、バグバズンは飛び上がり、回避した。バグバズンは翅を広げていたのだ。逃亡しようとしていたのだった。ネクサスは追尾しようとした次の瞬間、背中に火花が散った。

「クッ…！」

ネクサスが振り向くと、数機のＫＬＦが飛行していた。政府からの視点ではネクサスもビーストと同じ扱いにされているのであった。

『γ０１と０２はビーストを攻撃、γ０３はウルトラマンを攻撃せよ！！』

『『了解』』

一機のＫＬＦがさらに発砲してきた。ネクサスは横に前転して避けた。それでも攻撃してくる。

じっとＫＬＦの方を向き、そして逃げようとするビーストの方に顔を向けた。バグバズンは残りのＫＬＦに追われながらもこのまま街へと逃げようとしていた。

―逃がすか…！！

「フン！！　ハァァァッ…」

ネクサスは両手を左脇腹に持っていってエネルギーを溜めていった。

「シェアッ！！！」

そして両腕を十字型に交差し、”クロスレイ・シュトローム”を発射した。

ＫＬＦはそれを察したのか、横に避けた。光線はバグバズンの背中に直撃し、火花が散った。

「キィィアアアアアッ！！！！」

バグバズンはそのまま地上に落下していき、地面に叩きつけられた。しかし、その時には既にビーストの姿はすっかり消えていた。

ＫＬＦはミサイルをネクサスに目がけて発射してきた。

「グァアアアッ…！！！！」

ネクサスの身体でだけではなく、周囲にも爆発が起こった。しかし、そこにはもうネクサスの姿は消えていた。

「イテテテテ…」

レンは痛みに耐えながら、森の中を歩いていた。

「酷い目に遭った…。なんなんだよあいつら…。同じ人間だってぇのに…、ってか折角守ってやってんのによ…」

彼は愚痴を言った。すると、第二者の声がした。

「どうやら、貴様はまだその力の価値を分かってはいないようだな」

「なっ…！？」

レンの足が止まり、すぐに振り向いた。

「だ…、誰だ！！？」
「私は、貴様の心に潜む闇だ」
「闇…？」
「光があれば、闇も存在する…。貴様はそういう宿命を背負わされたということだ」
「何だって…！？」

すると声がしなくなった。レンは周囲を見回すが、何処にも人影は見えなかった。

一方、レントンはどうなのかと訊かれれば、正直ゲッコーステイトの裏側に驚きや後悔を隠せなかった。

例えばホランドである。やはり近くで見るととてもかっこよく見られた。

てな訳でもなく、普段は下はパンツ姿であり、オッサンかとつっ

こみを入れたくなるほどであった。

そしてメンバーの一人であり、操縦士であるタルホ・ユーキはどうなのか。

レントンが大量の荷物を運んでいた時だ。

「レントン、タオルお願い！！」

「は、はい！！」

彼は荷物を置いた後、すぐにタオルを持ってきた。そこにはただバスタオルを巻いただけの姿の彼女がいた。レントンの心では興奮していた。

「ありがと？」

彼女は”ｒａｙ＝ｏｕｔ”ではグラビアの担当をしている。とても魅力的に見られた。ところが性格面では…。

「ってこのタオル湿ってるじゃない！！！　役立たず！！！　それにビールも！！」

「ずいませんっ…！！！！！」

レントンは彼女にビンタされた。

そしてしょんぼりとしたまま洗面所を後にすると、マシューが廊下を歩いていた。

「おお何か大変そうだな！！　それじゃあ俺の報告書頼むぜ！！」

彼に報告書を渡された。

レントンがいる状況は一言で言うと…。

―オレはただのパシリだ…。これじゃあ凹んでしまうわ…。

彼はもはや泣きたい気持ちであった。レントンは他に何もできないし、新入りなので現時点の仕事はただパシられるだけであった。

しかし、最大の問題は次のことであった。

彼がまたしょんぼりしたまま荷物を運んでいると、エウレカがいるのに気がついた。

「ヘンなカオ」

エウレカは、レントンが変なニヤけ顔を見て呟いた。レントンは慌てて、ごまかそうとした。

「い、いや違うんだ…！！　これはただ別に君への思いを裏切ったわけではなくて…！！！」

エウレカは近づき、レントンの頬を抓った。

「ヘンなカオ」

そして彼女は彼を通りすぎた。既にレントンの心は時めいていた。彼にとって唯一の救いは彼女だけであった。

しかし、その彼女が最大の問題であった。

レントンの背後から3人の人影が走ってきて、そのうち1人が彼の背中を強く蹴り飛ばした。

「ちょーーっ…！！！！」

彼は吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。すぐに後ろを振り向いた。そこには3人の子供が見下していた。

一番年下の黒人の幼児であるリンク、真ん中の女子であり、レントンの背中を蹴った張本人であるメーテル、一番年上で普段は無口なモーリスである。

「うちの”ママ”に手ェだしたらミンチにしてハンバーグよ！！」
「ハンバーグ大好き！！！」

レントンはそのまま地面に屈し、項垂れた。運命の女神が子持ちだなんてショックを隠せなかった。

「わーーーーい！！」
「お馬さんだーーー！！！」
「ぐあああああっ…！！！！！　人の上に乗るなぁぁぁぁっ…！！！！！」

メーテルとリンクはレントンの背中に跨り、おもちゃ道具のように扱われた。

―一体…、何しに来たんだ……、オレ…？

「はぁ…」
「おい新入り！！　ちょっとおめぇに話があるんだ！！」
「えっ？　なんですかマシューさん？」

レントンはマシューに呼び出され、部屋の中に入った。そこには彼女であるヒルダもいた。

「あのな、エウレカのことだけどな」
「エウレカが…、どうかしたんですか？」

すると、あるはずもない事実を口にした。

「エウレカな、ああ見えても実は３０なんだ…」

一瞬空気が凍りついた。

―みっ、…三十路（みそじ）…！！！？

レントンはさらにがっくりとし、部屋を出ていった。

その様子を見てマシューは大爆笑していた。ヒルダは呆れていた。確かに肉体年齢と実際の年齢が一致しないような事柄はゴマンとあるが、さすがにこれはないと感じられたからだった。

「マシュー！　誰がそんなの信じるのよ」
「アイツ！」

マシューは去っていくレントンを指差した。

「いやあ、イイオモチャが入ってくれた！！　ははははは！！！！」
「子供達とエウレカのこともいずれ分かることよ」
「まぁ…、それまで遊ばせてくれよヒルダちゃん。それに、別に”あの事”は俺が話す訳でもないしよっ…」

マシューはレコードのラベルを見ながらそう言った。

ホランドはコーヒーを飲みながら、廊下を歩いていると格納庫のブリッジにメーテルが何か見ているのに気づいた。

「よおメーテル、カボチャパンツ」

彼女はすぐに振り向き、顔を赤くした。

「ホランドのエッチ…！！！」

彼女はすぐにスカートを押さえた。

「別に見たかねぇ…。…ところでお前は何してるんだ、こんなところで？」

「ええっとねぇ…、ママがねっ、またニルヴァーシュと話してるの。何話してるのかなぁ…？」

「ふうん…」

ホランドはニルヴァーシュの胴体に乗って話しているエウレカを見ながら、コーヒーを啜った。

彼女は機械の心と話す事が出来るのであった。それは本当かどうかは確かめる術は皆無だが、彼女は特別だということはホランドは確信していた。

「おーい、エウレカ。ニルヴァーシュばっかと話してないで、たまには子供達と遊んでやれ、母親だろ」
「うん…」

彼女は2人の存在に気付き、ニルヴァーシュから降り、メーテルに近づいた。彼女はエウレカに懐いてきた。

エウレカは、他の人と違って、まるで人形のように喜怒哀楽がないのであった。

「なぁ、急にニルヴァーシュに話しかけて、どうかしたのか？」
「うん…。あの時、どうしてニルヴァーシュは起きたのかな？　レントンはあんなにフニャフニャなのに…」

彼女はセブン・スウェルが発生したあの時を思い出しながら、ホランドに話した。

「フニャ…。ああ、あんなもんだろ。まだ自信がねえっつうか…」
「自信って…、ないと困るものなの？」

ホランドは彼女の方をゆっくりと振り向いた。

「困るよ…。自分を信じれねぇとつれぇもん」
「ふうん…」

―セブン・スウェルが発生したのは、単にパーツが揃ったから…？
だとしたら、レントンは”特別”じゃねぇってことか…？

ホランドはふと疑問に思った。

Ray Of Light（後書き）

「何！？　パトロール隊に発見された！！？」

「試すのね」

世間の救世主が、彼を試す…。

「貴様の仲間が…、闇に陥っていく姿を見届けるがいい…」

巨人の耳に聞こえる闇の声…。

「もしキミがキミを信じられないなら、私がキミを信じるね」

少年が窮地に陥った時、救いの手が差し伸べられる…。

――Next Phase ”Head On Collision”

―見える！！　トラパーの波が見える！！

Head On Collision（前書き）

Name from “正面衝突” By Koshi Inaba

Head On Collision

ある上空を軍のパトロール船が飛行していた。

モニターが、ある飛行物体の存在に反応した。

「おい、なんだこのデカイの？　登録ないぞ」

「あれ？　さっきまでなかったはずなんっスけどね…？」

そして詳細に正体を暴いた。

「こ…、これは…！？」

「何！？　パトロール隊に発見された！！？　あ゛！？　ＣＩＦが壊れただと！！？」

ホランドはブリッジの席に座り、通信に応じていた。

「シ、ＣＩＦ？」

レントンは、リンクに何らかのコードで首を巻きつかれながらも、質問した。するとエウレカが答えた。

”ＣＩＦ”とは”コンパク・インター・フェアレンサ―”の略称で、コンパク・ドライヴが発する残留トラパー波を相手のレーダー波と相殺させるシステムである。それによって、今まで軍の監視を掻い潜って来たのである。

それが壊れたということは、軍に発見されやすい状況に陥ったのであった。今修理を進めているものの、未だに原因不明であった。パトロール隊に追いつけられるまでの時間はおよそ3分だった。

―月光号が…、ピンチ…？

レントンはそう思うと自然にコードから手が離れた。そしてコードの力がだんだん強くなっていった。レントンの顔が青ざめていっ

た。

「てか今オレがピンチだよ…！」

「ちゃんぴょーん！！！！」

それに関わらず、リンクは勝ち誇ったように喜んだ。レントンは首からコードを外した。そして、何故こんなところにあるのかとふと疑問に思った。

「リ…、リンク…。これ…、どこから…？」

レントンはまさかと思いながら彼に訊いた。

「えーっとね、そこらへんからちぎってきたの！！　ちっからもちーーーっ！！！」

レントンとホランド、タルホは呆れていた。ＣＩＦの損傷の原因は、単なる子供の悪戯だったとは、思いもよらなかった。派手に慌てすぎた自分達は後悔していた。

「リンク！！　めっ！！」

「め？」

エウレカは『だめっ！！』って言いたいのだが、リンクには通じなかった。それどころか、そう言った彼女自身も混乱してしまったのだった。

「”めっ”って何？」
「知らないわよ！！！」

2人はタルホに話を振った。急に話を振られた彼女は即答した。

「レントン、エウレカ」
「はい」
「ニルヴァーシュに乗れ」

ホランドの発言を聞いたタルホは驚いた。

「ちょっとホランド！？」
「いいか、お前らには囮になってもらう。月光号が逃げる時間稼ぎだ。パトロール隊を引きつけろ。コーヒーが覚めるくらいの時間でいい。行け」
「はい！！」

そしてレントンとエウレカは、すぐにニルヴァーシュのもとに向かった。

―…何考えてんの…？　ケーブル直すなんてすぐに出来るし、パトロール隊ごときに…。逆にニルヴァーシュなんか出したら狙われるだけ…。…はっ…！！

タルホは親指の爪を噛みながらそう考えていたが、すぐにあることに気付いた。

「試すのね」
「…タルホ。さとうちょーだい、４つ」

ホランドはその通りと言いそうな顔をしながら彼女に頼んだ。

誰かが机にコーヒーを置いた。ここは塔州連合軍の本部である。

「またコーヒーですか、ドミニク少尉。胃を壊しますよ」

「初めは憧れの人が飲んでたからマネしただけなんだけどね」
「ははは、そうなんですか」

そしてドミニクはコーヒーを啜った。

「それで？」
「例の白い機体が発見しました」
「そうか…」

彼は飲み干したコップを置き、立ち上がった。

「よし、最優先任務だ！！　月光号は放っておけ！！　”ニルヴァーシュ”を捕えろ！！」

レントンとエウレカは、ニルヴァーシュに搭乗し、既に発進していた。レントンは掌に”人”の漢字を何度も指で書いていた。

―パシリから解放されたのはいいけど…、大丈夫かなオレ…？

『大丈夫だよ。自信持って』

レントンの不安を感じ取ったのか、エウレカは通信を通じて彼を励ました。

彼は手を振って、『大丈夫だよ』という顔で返した。

―っつうてもなぁ…。

しかし、未だに不安であった。

するとモニターが複数の敵を探知した。

「えっ…！！？」

レントンはすぐに振り向いた。するとパトロール船が増えていることに気付いた。

そしてパトロール船はミサイルを発射してきた。

「うわっ…！！　警告はなしかよっ！？」

ニルヴァーシュは追尾してくるミサイルを回避する。しかし、同時に軍の思惑に嵌ってしまったのだった。

『こちらＨ－２５パトロール隊、目的地に追いこみました』

「よし、後は地上部隊に任せろ」

そしてドミニクは通信を終了した。

「あの谷はトラパーの流れのない”凪の谷”。つまりトラパーの浮力を失ったやつは、ただ落下するだけだ」

そういうこともニルヴァーシュは気付いていた。ガタンと音がするのを2人は気付いた。リフボードの様子がおかしかった。

「リフボードが浮かばない…。っていうことはトラパーがないんだ…！！」

そのままニルヴァーシュは落下していく。

「うわあああああっ！！！」
『おい』

ホランドと通信が繋がった。しかし、慌てている様子はなかった。それに疑問を持ちながらも、レントンは応答した。

「ホランドさん！！」
『ボウズ今日は運いいな』
「はぁっ！！？」

レントンは、ホランドの何も変わらぬ態度に動揺した。

『リフ乗ってる奴なら、朝のラジオは聞いただろ？　今日イースタン地方でクラス８の地震があった。地震で噴き出たトラパーは偏西風に乗って、この谷にも来ているはずだ。この地形なら上空２０ｍ付近にトラパーが届いている』

「上空２０ｍってそんな低空のトラパーレーダーに映りませんよ！！　どうやってのりゃいいんですか！！？」

するとホランドはこんなことを言った。

「さあ、知らん」

『はぁぁっ！！！？』

「女の前だろ。必死扱いてかっこつけろ」

ホランドはまるでレントンを見捨てたかのように振舞った。これ

はタルホも黙っていられなかった。

「ちょ…！！　死んじゃったらどーすんのよ！！？」

「使えねぇなら月光号（ココ）にいてもしょうがねぇだろ」

一方軍の本部では、モニターにもう一つの反応が現れた。

「地中３００ｍより、微量のトラパー波が…！！？」

「何…！？　ビーストか…！？」

ドミニクは驚いた。

「まさか…、ここを嗅ぎ分けてきたということなのか！？」
「作戦を中止しますか…！！？」
「…、いいや、続行しろ！」

それでも尚、作戦を続行するのであった。

レントンは１００％中１００％、いやそれ以上無理だと思っていた。自分にはトラパー波を見ることができないと確信していた。

さらに彼に追い打ちをかけるように、地中からバグバズンが出現した。

「いいいいっ…！！！？　か、怪獣！！！」

レントンは藪から棒なことにビビった。

バグバズンは地中に身を潜め、自分の舌を駆使して人間を捕食していたのだった。またネクサスによって傷つけられた翅はほとんど回復していた。

背後にはパトロール船、前方には1体のビースト、トラパー波のないこの環境…。もはや絶体絶命であった。

―ムリだよ…、ムリだよ！！！　どっちみちオレ、死んじゃうよぉぉぉっ！！！

レンはバグバズンの姿を、谷から目にした。

―今度こそ、おまえを逃がしはしない！！！

レンは”エボルトラスター”を抜き、ネクサスに変身した。

「うわっ…！！！　こっちに来る…！！！」

突如赤い光が現れ、バグバズンに衝突した。ビーストは吹き飛ばされ、後ろのめりに倒れた。

「あれ…？」

そして赤い光が地上に降り立ち、ネクサスが姿を現した。

『”ウルトラマン”です！！！　ウルトラマンが出現しました！！』
「やはり来たか…」
『攻撃命令を！！』
「いや、待て！！　まずあのＬＦＯを…」
『ビーストがいては作戦の邪魔です！！』

またもや軍はネクサスも含めて攻撃しようとしていた。

「シェアッ！！！」

ネクサスは掛け声とともに走りだした。バグバズンは首を大きく振りまわした。しかし、巨人はキャッチし、ビーストを持ちあげて振り回し、遠くに投げ飛ばした。

そして、ネクサスは後ろを振り向き、ＬＦＯの無事を確認した。

「きょ…、巨人…！！？」

レントンはいきなりのネクサスの登場に驚いた。

ネクサスはビーストの方を向き、走り出した。ビーストは尻尾を振り、応戦した。

「あちゃあ…、こりゃ予想天外になっちまったな…」

ホランドは月光号からその様子を見降ろして呟いた。

「ってなんで普通にトボケてるわけ！！？」
「あ？」
「早く、２人に戻るよう言って！！」

タルホはそう急かした。しかし、彼は聞きいれる気はないように見えた。

「なぁ…、さっき言ったろ？　あいつはここにいてもしょうがないって？」
「ああ…、もう…！！」

しかし、それとは裏腹に彼はレントンに期待を寄せていたのであった。

―奇跡を見せろ…、新人（ルーキー）！！！

「フンッ！！」

巨人は構えた。そして接近し、怪獣を抑えた。ビーストは腕を振り回してきて、巨人は防いだものの、もう片手で背中を攻撃された。

「グアッ…！！！」

ネクサスは横に飛ばされた。すぐに振り向いた途端、両手で首を掴まれた。

巨人は解こうと掴むものの、前回より力が強く感じられた。おそらくビーストもまた学習したのであろう。

ビーストはいったん離し、尻尾を振り回して巨人を吹き飛ばした。そしてニルヴァーシュのほうに身体を向け、歩き出した。

―こっち来たぁぁぁっ…！！！

レントンは動揺した。しかし、ネクサスが中に入ってきて怪獣を抑えた。ただ、時間の問題だ。

『大丈夫』

するとエウレカから通信が繋がった。それで彼は我を取り戻した。

『できるよ。ニルヴァーシュも言ってる』

彼女はレントンに助言した。しかし、彼は未だに黒い霧の中であった。

ゲッコーステイトに加入する前、何も活躍することはなかった。何も出来ることがなかった。そのために自信を持てなかったのだった。

「そんなの…、その……、あの…、ごめん……」

レントンはうまく言葉に出来なかった。

『わかった』

するとエウレカはすぐに解決策を思いついた。

『キミが自分(キミ)を信じられないなら、私がキミを信じるね』

彼女はそう助言した。

『ニルヴァーシュは私、キミはニルヴァーシュを信じてあげて。計算あってるかな？』

彼女はレントンにアドバイスを続けた。こういう切羽詰まった状況の時に信じられるのは自分だと限られるとは言い切れないようだ。

『ほら、あの巨人をそう言ってる』

「えっ？」

ネクサスはバグバズンを押さえていたが、顔をニルヴァーシュのほうに向け、ゆっくりと頷いていた。

『今だ』とも『お前なら出来る』とも捉えられるが、今はそんなことを考えている場合ではなかった。

―わかった…。分かったよ…、やってみる…。やってみなきゃわかんないよな、エウレカ…、銀色の巨人…。

「は…、はい」

レントンは恥ずかしさを隠せずにいたが、返事した。

「くっ…、くっくっくっ…」

「！！！」

ホランドは不気味な笑い方をした。タルホはそれを見て背筋がびくっとなった。

「思ったより、いーコンビだ」

彼はそう呟いた。

「タァァッ！！！」

バグバズンの顔面にアッパーを決めた。ネクサスは接近し、両手でパンチを決めた。

「キァィィィィィィッ…！！！！！」

ビーストは吹き飛ばされ、地面に叩きつかれた。

「シェッ！！！」

ネクサスは掛け声と同時に走りだし、高くジャンプした。バグバズンは立ち上がり、見回して、やっとその姿を見上げた。

「入射角２２度にセット！！」

「シャフト安定、地上まで７１ｍ！！」

２人はトラパーの波に乗るためにセッティングをしていた。

刻々と近づいてくる地上、しかし、レントンはあることに気付いた。人には見えるはずもない存在を感じ取っていった。そしてついに…。

―見える…！！　トラパーの波が見える！！

レントンの視界にトラパーが現れた。

ニルヴァーシュは落ちていく。それに気づいた、地上にいる人がすぐに慌てて逃げ出した。

それでもなお、ニルヴァーシュはトラパーに乗った。しかし、バランスの調整がうまくいかない。そのために進行方向が左右にぶれていた。ところが次の瞬間…。

ニルヴァーシュは上に高く跳びあがった。そして、空中で一回転してトラパーの波に再び乗った。

それを見たホランド達は驚いていた。つい、あの技の名を口にした。

「カットバックドロップターン…！！！」

バグバズンの視線にはネクサスがいた。

「デアアアアッ！！！！」

ネクサスの片足が光り始めた。その足を振り上げ、ビーストの頭部に直撃した。火花が散った。

「キィアアアアアッ……！！！！」

バグバズンは苦しみもだえた。すると身体が自己破壊し始め、前

のめりに倒れていった。

ネクサスが着地すると同時に爆発し、粒子化した。

そしてニルヴァーシュも着陸した。

「す…、すげぇ…。ウルトラマンが出てくるわ…、新入りがカットバックドロップターンを決めるわ…、なんなんだよ今日は…」

「かっこいいーーー！！」

マシューは驚き、子供たちは喜んでいた。ストナーもまた、雑誌のネタとして撮影していた。

「…ははは、マジかよ…。トラパーを見るわ、ターンを決めるわ…、まったく面白すぎるぜ…！　レントン・サーストン…！！」

ホランドはすっかり感心していた。

「見た！？　エウレカ、オレの今のターン！！？　すげーよすげーよ！！　ありがと！！　君のおかげだよ！！！！」

レントンはすっかり興奮状態であった。エウレカの両手を取って大きく握手していた。

「それに…、ありがと！！　銀色の巨人！！」

ネクサスはレントンの方を向いていた。

「フン、シェッ！！」

腕をクロスし、下腕を上げると巨人は光となって姿を消した。

「消えた…？　なんだよ、せっかく…」

ところが言葉に詰まった。いいや、言葉は頭の中で既に整理がついているものの、これ以上言いだせなかった。

なぜなら自分で自分の口を押さえているからだ。それに加え、レントンの顔は青白くなっていた。

「おい、どーした？　早くしないとパトロール船が…」

ホランドは聞いた。するとか弱い声でレントンは答えてきた。

『いや…、あの…安心したら…、さっきの回転落下の…、後遺症が……。うぷっ』

―おいおいおいおい…、まさか…！！？

ホランドは冷や汗をかいた。

『～～～～～～～～～～～……!!!!!!!!!』

通信に、声にならないレントンの何らかの音がした。さっきので酔っていたのだった。

ホランドは引き、他の人達も引き、耳を押さえていた。

―あいつ…、確かにレントンだったよな？　なんであそこにいたんだろ？　…もしかして、俺と同じように旅をしたりしてな…。

レンは谷の底を歩きながら、そう思った。

―それに…、隣にいたあの緑色の髪の女の子は誰だろ？　…まさか、彼女ができたんじゃ…！　…ってそんなわきゃないか…。変人って言われてるあいつがな…。

そう考えながら、次の目的地へと歩いて行った。すると、またあの声がした。

「ふはははははは…」

「おい、またかよ…。あの闇とか…」
「もうじき、奴らが闇に飲み込まれる日は近い…」

謎の声はそう呟いた。

「奴ら…？」

「貴様の仲間が…、闇に陥っていく姿を見届けるがいい…」

「何…？　なんで…」

また声が消えた。

「あいつ…、なんか中途半端で終えるからな…。全然わかんねぇ…」

レンはまったく意味を掴めなかった。しかし、仲間と聞いて何か不安を抱いていた。

―仲間…。レントン…？　なんであいつが…？

ところ変わって、軍の本部内のある密室…。部屋中に様々な書物があちこちに積み重なっており、レコードはクラシックの曲を流していた。

そこに白髪で長い髪を持つ謎の男性が椅子に座っていた。ドミニクはその男性の元にコーヒーを置いた。

「コーヒーはブラック…、砂糖は…3つ、いや4つ…でしたよね…？」

男性はコーヒーを口にし、こう言った。

「ニルヴァーシュを取り逃がしたそうだね…、ドミニク」
「は…、申し訳ありません…」
「いいんだ、手はある。それにあの7色の光、セブン・スウェルを見て気分がいいんだ」

そして彼に微笑んだ。

「…時は動き出した…！　ワルツでも踊りたいぐらいワクワクするよ…」

闇の手は身を潜め、転機を待ち望んでいた。

Ｈｅａｄ　Ｏｎ　Ｃｏｌｌｉｓｉｏｎ（後書き）

「おいちょっとそこの若造！！　手伝わんかい！！」
「えっ！？　は…、はい…！！」

謎の老人に使わされる光の者…。

「おい、あいつらなんて二流だぞ」
「行きましょう！！　リフ大会！！」
「俺達は金目的でリフすんじゃねぇの…」

自分の仲間を侮辱されたことによって見返そうとする少年…。しかし受け入れられない…。

ある楽しみのために…。

「行くか、”波が寝る前”に！！」

――Ｎｅｘｔ　Ｐｈａｓｅ　”Ａ　Ｐｒａｉｓｅ　Ｃｈｏｒｕｓ”

「人間は…、すばらしいもんだ…」

A Praise Chorus（前書き）

Name from ”A Praise Chorus” by Jimmy Eat World

お久しぶりです！！　ブランク状態がこんなにも続いてすいませんでした…。

A Praise Chorus

空は晴れ渡り、日光が鋭い刃を立てて突き刺してくる。風はただ芝生の草を靡かせる強さであった。

レンは街を抜け、ただただポツンと何もない、ただ陽炎が漂っている芝生を歩いていた。

しばらく経って谷の中に入っていった。するとあんなに鋭い刃を向けていた太陽の姿が隠れた。

さらに歩いていると、山の麓に一軒の建物があることに気付いた。しかも、数十匹の牛がただ本能に従って歩きまわっていた。

山地が聳え立っているために、人にとってはとても住みにくいだろう。彼はそう思った。しかもさっきまで日光は見えていたものの、山地に入ってから見えなくなってしまっていたのであった。

―珍しいな…。こんな暗い所に牧場なんて…。

レンはゆっくりと歩いて行った。柵に手をかけ、歩きまわる牛を見ていた。

牛は歩きまわっている。一つの目的に向かって…。自由を求めてただ歩きまわっている。そんな望みのないこんな場所で何故か歩きまわっている。レントンもそうだ。今まで平和にだれまくり、自由を求めてただ闇雲に、皆からおかしいだろうと言われようとも、そ

の時を待ち望んでいた。何か共通点を感じられたのであった。
ただ今では、あの少女を連れて、自由さを求めて何処かへと旅立っている。

「おいそこの若造！！」
「うわあっ…！！」
「バカ野郎！！　そんなんでビビってんじゃないわい！！」

右から、藪から棒に老人が怒声を上げて、レンに声をかけた。
やや白髪交じりで顎にちょびっとした髭を生やしていた。しわは多いとも少ないとも言えなく、初老だと思った。しかし、口調は荒かった。

「じっとワシの牛を見てねェでとっとと手伝わんかい！！」
「え、ええっ！！？　俺はただ…」
「口応えすんな！！　ほれ！！」
「えっ…！？」

老人はレンに彼の身長ほどのフォークを手渡した。彼はすぐに驚き呆れた。

「あの…、何ですかこれ？」
「何とぼけておる！！？　おめェも手伝うに決まっとるじゃろ！！

？」
「いや、あの…、俺ただ旅をしてるだけなんですけど…！！」
「口応えすんなって言ったじゃろうがボケ！！　旅をしてる暇があるんじゃったらさっさと手伝わんかい！！！」
「ええーーーっ…！！？」

しかし、これ以上続けてもいたちごっこが続くだけなので、口答えをするのをやめ、仕方なく手伝うことにした。

―なんだよこのジジイ…。なんも関係ない俺に無理やりボランティアさせてんだよ…。

ふてくされながら、フォークを持って牧場の敷地内に入っていった。

「そのめェに、作業服来てからにしろ！！」
「わかったよ！！　わかったからもうこれ以上急かそうとするのやめてよ！！！」

もう自棄になっていたレンであった。

一方月光号では、ホランド達は昼食を食べていて、終盤に掛っていた。残っているのは、1枚の大きなお皿に一口分のコロッケだけだった。

エウレカを除いて、ほとんどのみんなはその欲に走っていた。

―隙あり…！！！

ホランドはフォークを持ってコロッケに刺そうとする。

―させるか…！！！

しかしタルホがフォークで彼のと交わして防いだ。ホランドは何とか抜こうとしていた。

その間にレントンは箸でコロッケを掴んだ。レントンは誇らしげに笑顔を作った。

「悪いですけどオレ、成長期ですから！！」

そして誇らしげにそう言った。レントンはそのまま口に入れようとした。

「レントン！！」

マシューがいきなり彼に声をかけた。レントンが振り向いてみると、マシューはエウレカのスカートをめくっていた。彼女は不思議なほどにノーリアクションだった。

レントンの箸から力が失せ、コロッケが地面に滑り落ちた。

「あ〝ーーーーーーーーーっ……！！！！！！」

みんなは悲鳴を上げた。

「最後のコロッケが…」

「あーあ、粗末にするなよ。折角作ったのにもったいないじゃないか」

ハップはコロッケを拾い、何の躊躇もなく口の中に入れた。月光号のみんなはその姿に驚いていた。

「ハップ…、お前…」
「…今、普通に拾って食べたよね…？」
「さすが副リーダー、格が違う」
「3秒ルールね…」

ホランド、タルホ、マシュー、ヒルダの順に驚きもしくは感心の音を上げていた。

「おなかすいたぁぁーーーーっ！！！！」

食べたばかりなのにリンクはまだ食べたがっていた。

レントンはすっかりあの事に内心興奮していた。

今月光号は食糧難である。それもそのはず、ゲッコーステイトの団員は全員で18人であった。しかも食欲があまりにも過剰ですぐに絶えてしまうのであった。

そこで、誰かが買い出しに行くことになった。

「とりあえず野菜と米だな」
「シガーマンの新譜のＬＰ！！」
「リフボードのワックス」
「ハブラシ２０本！」
「フィアレスの限定リング？……」
「フィルムだな」
「コーヒーもだ」

それぞれ必要不必要なものが混ざっていた。

「で…、これで買い出しに行けって……、ムリですよこれ…！！！！」

レントンが貯金箱を叩き割って中身を見てみると、札が１枚、砂利銭が数十枚であった。今のみんなが言った依頼品をすべて買うためには程遠すぎている。

「金がねーんだ、しょうがないだろ」
「頑張れ、購買部長」

しかし、ホランド達からやる気がないように感じられた。

「…じゃ何か仕事しましょうよ」
「してるだろ、ｒａｙ＝ｏｕｔの編集」

レントンの提案にストナーが反論した。

「あ、今回、表紙はタルホさんですか。前回もそうでしたよね？」
「そーでもせんと絶対売れん…。いや売れん」
「まぁ趣味で出してるみたいなもんだからな」

レントンはため息をついた。イメージが崩れかけ、あまりのやる気のなさに呆れそうになっていた。

「それじゃ他の仕事は？　配達とか依頼はあるんでしょ？」

彼は訊いた。

「ダメ。今日は大事な用があるんだよ」

ホランドはそう言った。レントンはそれがよくわからなかった。

―なんで俺は、こんなハメに…！！

レンは今牧場の所有者の手伝いをしているのであった。日陰だと言えども、熱さがこみあげてくる。彼はすでに作業服を着ているものの、長袖なので汗が大量に滴り落ちて来る。

藁をフォークで刺して牛に与えたり、藁を集めに行ったりなどしていた。簡単なのだが飽きやすく、仕事量が半端なかった。

―暑い…！！

ラジオの予報によれば、気温は３５度を過ぎる見込みだそうだ。彼はタオルを持って額などから流れてくる汗を拭きとった。

レンはフォークを地面に突き刺し、うつむいて休みを取った。しかし、レンの後ろから怒声が響いた。

「こらぁぁぁっ！！！　何サボっちょる！！？　まだ2時間もたっとらんぞ！！」
「ええっ！！？　結構な時間働いたでしょ！！」
「ワシはまだピンピンしとるぞ！！」
―このジジイ、元気だなぁ…！

もう作業開始から約2時間が経過していた。レンからしては、この気候では結構な労働時間であった。

彼はそろそろ理由を訊いてもいい頃だろうと思い、実行に当たることにした。

「ていうかさ…あの…、なんで俺を…」
「あ〝っ！！？」
「…なんで俺までこんなことしなきゃいけないの！？　ただ俺は通りすがりの者で…」
「この牧場は、ワシと牛と羊しかおらん！！」

周りには、牛や羊などがはいつくばっていた。

彼の仕事は主に肉牛や乳牛を飼育したり、羊の毛を刈りとったりするという、世間からはもう知られている普通の仕事である。しかし、実際やってみると結構大変さを実感した。

それでもあの年齢で、たった一人だけでどうやってこんな重労働

を続けられるのかと、疑いを持った。

「それじゃあバイトとか募集すればいいじゃん！！」

「最近の奴らはこんなせめェとこにはこんわい！！　じゃが、おめェみてェに偶然ここを通りかかった人に呼び掛けて、こんな風に働かして、何とか生計を立てとるわい！！」

「どんな自転車操業だよそりゃ！！！！」

レンは老人に突っ込みを入れた。

「子どもとかいないの？」

「ああ、男が2人おったけど、結婚やらなんやらで全員すっ飛んじまってよォっ！！　なんて親不孝者なんじゃあいつらは…」

老人はそっぽを向き、腕を組み始めた。レンは、外はこう不機嫌そうに見えても、寂しさを感じているのだろうと思った。

普通こういう職業は息子か娘に継がせるものだろうと思っていたからだ。

同時にレントンのことを思い出した。彼は後を継がせるようアクセルに無理に言われていると言っていた。彼はそれに対して、別に継ぎたくなかったら継がなければいいじゃないかと答えた。

しかし、この状況に遭遇してから、何か変わりかけていた。もし継がなかったらこんなことになるとは、今まで施設暮らしで周りのことを全く知らなかった彼には思っていなかったのだった。

「寂しくないの！？」
「なあに、変わりにこいつらがおる！！　６年前からこいつらと共に精一杯生きとる！！」

老人は見ろというかのように首を大きく横に振った。周りにいる牛などは、彼にとっては息子達の変わりみたいなものだった。

「それよりそんな無駄話しとらんで、とっとと働かんかい！！」
「はいはい…、分かったよ…」

レンは地面に刺していたフォークを抜き、再び作業に乗り出した。

―レントンのやつ、どーすんのかなぁ…。

そう思いながらも再開した。

一方とある街である。

そこにはレントンとエウレカ、そして彼女の”子供”３人が出かけていた。食糧などを買い出しするためであった。

周りには屋台や建物が立ち並んでおり、多くの人達が訪れ、盛んに盛り上がっていた。

「わーー、人がいっぱいだね」

エウレカはその状況に注目していた。

「そうねー、金はちょっぴりだけどねー…」

レントンはそう答えるが、内心ゲッコーステイトの有様にがっかりしていた。

—ロクに仕事しないで、コロッケ一つで戦争かよ…。ゲッコーステイトなんて、ただのグウタラ集団じゃないのか…？

彼はそう疑った。また、そういう彼らの建前に魅かれて、何の躊躇もなく入隊してしまった事を後悔した。

—なんか面白いことないかな…？　…待てよ…。

そしてつい、レントンは顔に喜びを露わにしてしまった。それを見たエウレカはやや疑問に思った。

—もしやこれって…、エウレカと初デート…！！？

「ぐはっ…！！！」

突如レントンの腹に突き刺されるような痛みを感じた。腹を押さえ、地面に腕をついて項垂れてしまった。

顔を上げると、拳を立てているメーテルの姿が目に入った。女の子にしては信じられないほど力が強かった。

「…今なんか変なこと考えてたでしょ…！」

―ぐっ…、こいつらさえいなければ…！！

レントンは3人の子供達に恨みを持つようになっていた。エウレカに触れ合おうとしても、いつもこの子達に妨害されまくっていたのだった。ただあくまでこれは彼女を想ってのことであった。

彼らは色々な屋台を訪れた。服を見たり、玩具を見たり、食品を買ったりしていた。しかし、それと同時にリンクが悪戯をしたり、レントンは恋愛に関する本を見ていた。しかし、余りにもよくない結果ばかりだったので今にも凹みそうになっていた。

レントン達が歩いていると、偶然リフ大会のチラシを目にし、レントンは一枚取った。彼は出たいと思っていた。

「ねぇ、エウレカってホランドさん達のリフ見たことあんだよね？」
「うん」
「見てぇなー。どんなんなの？　カットバックとかタメがないの？　３６０とかきれいにキメたり？　スタンスは特殊なの？」

レントンはすっかり、彼の活躍に夢中になっていた。

彼は雑誌でしか彼らの活躍を見たことがない。だからゲッコース

テイトに入ったことを機に生で見たいと思ったのだった。

「エウレカ？」

しかし、彼女は答えなかった。答えないというより、他のものに気を取られていた。

彼女の視線の先には、エッジ部分などがすっかりボロボロになっているリフボードが壁にかかっていた。エウレカはそのもとに歩きよって座った。レントンも付いていった。

「かわいそう…、ボロボロだわ…」

「ホントだ。手入れが全然できてないね。こんなリフボーダーは風上にもおけない…」

彼がそう言った時である。背後に足音がした。レントンはすぐ振り向いた。

そこには、すっかり鋭い眼で刺すように睨んでいる不良達が3人いた。どうやら持ち主だそうだ。レントンはすっかり恐れをなした。

「…え…、ええっと……その…」

「おい…、勝手に他人のものを触ってんじゃねぇよ…」

すっかりいらつきを感じられる言動であった。1人が、レントンが持っているチラシに気付いた。

「なに…、リフ大会…、お前も出んの？　…マジ？　ガキ部門なんてあったか？」

レントンはそのからかいに納得いかず、すぐに言い返した。

「あの…、オレだって一応、ゲッコーステイトの一員なんですけど！！」

すると白けた。パッとしない表情で不良達は顔を見合わせた。

しばらく、沈黙が走った。

「「「あっはははははははは！！！！！」」」

すると3人は大爆笑した。

「おいおい、いつからゲッコーステイトが託児所になってんだよ！！！　可笑しくてものも言えねぇぜ！！！」

1人がさらにからかった。レントンは心の底からいらつきを感じていた。

「ゲッコーステイトねぇ…」

黒いキャップを被った1人の笑いが止み、こんなことを口にした。

「…あんな二流のリフ集団が何だって？」
「二流？」
「ああ…」

煙草を一本取り出して火を付けると、さらにからかってきた。

「ゲッコーステイトは一度も大会に出ないで、ｒａｙ＝ｏｕｔを発行して自らをカリスマ化しているだけ…。ホントは実力がないってことがバレたくないんだろ？」
「そんなことない！！」
「じゃあお前、雑誌以外でホランドのリフ見たことあんの？」

答えはノーだった。でもなんとかして言い返そうとしていた。しかし、見たことないから何も思いつかなかった。

「……っ、いや、オレは…」

「っはっはっは…！」

不良達は笑いながら立ち去ろうとしていた。しかし、エウレカが口を開けた。

「私、見たことあるよ」
「ああっ…？」
「ホランドのリフはね、”ワクワク”なの」

それを聞くと、不良達はまったく意味を掴めなかった。

「はぁっ、何言ってんだ？」
「行こうぜ」

しかし、そこにはリンクが鼻水を垂らして不良の1人を見ていた。

「ねぇ、あの人鼻に金ピカの鼻くそがついてるよ」

そして金、金と言いながら走って去っていった。

―おいいいいいいリンクッッ！！！！　お前、何言ってんだ…！！！？

不良は自分のお気に入りの鼻ピアスに文句を言われたことに、ぷつんと切れた。そして不条理にも何故か、怒りの矛先はレントンに向けられた。

「はっ…、ははは…」

一発の鈍い音が鳴り響いた。

―ん？　急に胸騒ぎがすんのなんでだろ？　まいっか…。

レンはすぐに振り向き、谷の出口から見える景色を見てそう思った。

しかし、関係ないだろうと思い、建物の中に入っていった。

レントン達は月光号に帰ってきた。荷物を置き、レントンは早歩きでホランドのもとに向かった。

他のみんなは彼のおかしな様子に驚いていた。

「遅かったなレントン…、ってなんだそのカオは…！？」

彼の顔はボコボコにされていた。よほどあの不良はおかんむり状態だったのであろう。

レントンはリフ大会のチラシを見せて提案した。

「ホランドさん…、行きましょう！！　リフ大会！！　賞金２００万！！　これで財政難も食糧難も解決…、…アレッ…？」

しかし、無反応であった。何言ってんだお前って言いそうな顔をしている人がほとんどであった。

「ふふ～ん、そのカオ…。殴られた相手を見返したいってトコかしら？」

「いえ、そんなんじゃ…」

「俺達は金のためにリフなんかしねぇの！　それにあんな人がいっぱいでトラパーが薄いところでやってもおもしろくねぇよ…」
「そんな…」

あの不良が言っていたことって本当だったのか…？　レントンはそう思った。ただリフが上手いのは単なる建前で、実際は上手くないんじゃないのかと自信をなくしていた。ただカッコつけている悪党じゃないのかと、落胆しかけていた。

「今日は大事な用があるっつうたろっ？」

ホランドはチラシを拾い、バラバラに破り捨てた。

そんな彼の姿を残念そうにレントンは見ていた。

「…すいません…」

「…じゃあ行くか…、”波が寝る前に”！！」

急にニヤリと、ホランドの顔が綻んだ。他の人達もそれを聞いて盛り上がった。

「えっ？」

レントンにはわからなかった。

しかし、彼らには彼ら流のリフの楽しみ方があるようだった。

レン達が働き始めて、もう４時間が経過していた。老人は切り上げることにし、レンにそう伝えた。

「終わったぁぁぁぁ…」
「なあにへコたれとる…」
「だってさ、結構暑かったよ今日は…」

仕事が終わり、レンは芝生の上で寝転んでいた。老人はそんな彼の姿を呆れながら見ていた。

「暑い暑いって甘えとる場合か…。ワシなんかこんな環境の中で毎日仕事しとるんじゃぞ…。ワシの身にもなってみんかい」
「もうなったじゃないか」
「あっ、そうじゃった…」

老人は気付いた。

レンは青空を見ていたが、すぐに老人の顔を見た。

「それに…、じいさんもけっこう疲れたんじゃねぇ？」
「そんなわけあるか…」
「だってさ、口調がなんか弱くなってるし」
「…、ふん、おめぇなんぞに言われとうねぇわ…」

レンの言葉に彼は顔を背けた。

「さて、、メシの時間とするか…。おめぇも付いてこい」
「えっ、いいの？」
「賃金みてぇなものだ。それともそのまんま出ていくか？」

レンはそれを聞いてすぐに上半身を起こした。彼の所持金はあまりないからだ。

「そんなわけないって！！　俺めっちゃ腹減ってるし！！」

そんなレンの慌てる姿を見て、一瞬だけ顔がほころんだ。

―ふん…。

2人は小屋の中に入っていった。見渡せば、木造のためか縦で切られた年輪の模様があちこちにあった。また家族らしき人達と一緒に撮った写真が掛けられてあった。

「おおそれか。ワシの倅と女房だ」

昼食の支度をしている老人がふと、写真を見ているレンの方を向いて話しかけた。

何か幸せなものを感じられた。勿論みんなが笑顔をつくっているからだろう。それに2人の息子も授かっているし、かつては幸せな暮らしを育んでいたのであろう。

しかし、今では老人一人である。

「倅はこんなせめェとこで住んでおったら息が詰まるわと、散々文句言いおって、ついにはここを出ていきおったわ。女房は6年めェに隠れちまってよォッ…」

だんだんと老人の口調が緩やかになり、何か寂しさを感じられた。

「ここに残ったのはワシ一人だけ…。それでも倅はもっと広い世界に入りたいと我儘ばかり…。このままいたちごっこが続くばかりじゃから…、勘当したわ…」

「かんどう…？　…かっ、勘当！！？」

レンは一瞬”感動”かと思ったが、すぐに理解した。

「勘当したなんて…、それじゃあ、この牧場はどうするつもりなんだよ！？」

「なあに、ワシが生きてる限り続けていくさ。元々ワシのもんじゃからな」

「もし、病気とかで働けなくなったら…？」

「…なぁに、そんな時は引退して、死ぬまでここでひっそりと暮らすわい」

老人は変わらぬ様子で答えた。

「随分前向きだな、じいさん…」
「まぁな…。ワシだって人間じゃ。時にはそんな出来事に遭遇して、悲しみや寂しさを感じる時がある…。辛いとも思ったことがある。…じゃが、そんなもん背負ったままで生きるのはより辛すぎる…」

彼はさらに続けた。

「いつまでもへこたれままでおれば、まぁるで自分が藪の中で無駄にもがき続けているのと一緒じゃ。誰とも顔を見たくないほど、このまま辛い人生を送るしかない。そんなことすんのは、ただ自分で自分を戒めるこそが唯一の方法だと考えるようなことしかせん腑抜け者だけじゃ」

老人は過去を想い浮かべながらそう言った。レンはただ黙ることだけしかできなかった。

「いかん！　始まってしまうわ！」
「えっ？」

老人は時計を見て急に慌てだした。レンは当然、理解不能であった。

「おい！！　おめぇも手伝え！！」
「また！！？　急になんだよ！」
「いいからさっさと手伝わんか！！」
「……仕方ねぇな…」

しかし、レンの心情は変わりつつあった。少し手伝いたくなったのであった。

「何ですか、このでかい穴は…？」

ゲッコーステイトはある峰の山頂に到着し、月光号を降りていた。ホランド曰く、ここでリフを楽しむそうだ。

レントンが見つけたのは火山口のような穴である。リフスポットとは程遠い場所に思えた。しかし、ゲッコーステイトはリフボードを抱えていた。

「なんだお前、知らされてなかったのか？」
「まったく…、ホランドったら意地が悪いのね…」
「そうか…、だから小僧はリフ大会なんぞに出ようといってたのか」
「楽しみは後に取っておくもんさ。…ほれっ」

ホランドはレントンに一枚のリフボードを投げ渡した。よく見てみると、自分のリフボードであることに気付いた。しかも新品同様にピカピカになっていた。

「まさか…」
「さぁて、来た来た来た…！！！」

穴からゴゴゴッと何かが噴き出そうな轟音が鳴り始めた。彼らはスタンバイしている。

3、2、1のカウントでそれは起こった。

「イヤァッホォォォォォォォッ！！！！！」

穴から大量のトラパーの粒子がまるで噴火するが如く、勢いよく噴き出してきた。彼らはこれを見て興奮していた。

「なぁレントン！！　こんな大波乗ったことあるか！！？」

ホランドは興奮気味でレントンに訊いて来た。

「大波どころか津波ですよこれは！！　こんなの乗れるわけ―」

レントンが最後まで言いきろうとした、次の瞬間である。

メンバーが波に乗り始め、何の恐れもなく楽しんでいた。ある人は弧を描き、ある人は直線を引いていた。

レントンの背後にリフボードの影が映った。しかも原寸大である。見上げると、そこにはホランドの姿があった。

雑誌だけでしか見たことがない、あの有名なリフボーダー、ホランド・ノヴァクの雄姿を、今この目で初めて目撃することが出来た。レントンはそれで満足に満ちていた。

グウタラ集団に見えることがあったが、彼らゲッコーステイトは伊達じゃないということがやっと理解した。また、先ほどエウレカが言った”ワクワクする”リフはこういうものかと悟ったのだった。

レントンもまたリフボードを抱え、大波の方へと走っていった。

「うわぁぁぁっ……」

レンはつい口から感嘆を漏らした。彼はすっかりその光景に目を奪われていた。

「ほれ…、あの山の頂におる穴んとこから、月に3回ほどこういう沢山のエメラルド色の粒子の波を噴き出すそうじゃ」

「へぇー」

「ワシはいつも女房とこういう景色を眺めてたもんじゃのう…」

老人は煙草を吸いながら、懐かしそうに感じながらその風景を見ていた。すると、急に凝視し始めた。

「…また奴らがあんなところで遊んどるわ…！　おい邪魔じゃ！！

折角のいい景色だとゆうのに汚れてしまうわい！！！」
「いやそんなに叫ばなくても…」

老人は眼鏡を動かして、遊んでいる若者達を見た。そして呆れ果てていた。

「それにしても、奴らって…？」
「ゲッコー何とかという、軍人に反乱を起こしては、それを誤魔化すためにこんな風に波に乗って遊んどる連中じゃ」
「へぇ…」

―もしかして…、ゲッコーステイトっていう、レントンが尊敬してやまない人達のことだっけ…？

レンはそう考えた。

レントンはいつも話の話題はこのリフ集団であった。彼はそんな話を飽きるほど沢山聞いていた。しかし、たまにＲａｙ＝Ｏｕｔを見つけて買い、読んでみたら面白かったのであった。ただ、軍人であるドミニクに没収されてしまった。『何読者の期待を欺くような雑誌を読んでいるんだ』と言われて…。それでしか彼らのことは知らなかった。

ただ、遠目だが、実際見てみれば趣を感じずにはいられなかったのは事実である。

山の上ではリフボーダーが宙を舞い、トリックを決めている。

「でも、いいんじゃないのかな」
「何が？」
「だってさ、別にあんな綺麗な場所を汚しているわけじゃないし、それに…、何だか楽しそうだし」
「あんな若者しかハマらん遊びのどこが楽しいというもんじゃ」
「そこじゃなくて…。…なんだか…、いっぱい仲間がいて楽しそうだなぁと思って…」
「何？」

老人は不機嫌そうにレンの方を向いた。

「俺、ちっちゃいころは、あんまり仲間って言えるようなもん持ってなかったからさ」

あまり顔色は変えなかったレンだが、何かあったように見えた。

「はぁ、あまり仲間を作ることにこだわらん方が身のためだと思うのじゃがな…」
「何だって…？」

すぐにレンは老人の方を向いた。

「寂しさを作り出しているのは、ワシではなく、…ワシが作った仲間自身じゃからのう…」

「寂しさを生み出しているのは…、仲間自身…か…」

レンは既に農場を後にし、空を見上げながらさきほど老人が言った言葉を思い出していた。さっき老人が言いたかったことは、寂しさを感じたくなければ仲間を作るなということなのだろうか。

「…。ああわかんねぇ…」

その言葉にはよくわからなかったところが沢山あったので、レンは混乱した。

一方、影は密かに近づきつつあった。

A Praise Chorus（後書き）

BGM：SATISFACTION GUARANTEED／LOUDNESS

||Next：”Connection from 1 to 2”

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5487s/

ULTRAMAN NEXUS × Psalms Of Planets Eureka seveN

2011年11月11日05時22分発行